



目 次

はじめに	1
第1章 ヴォーリスの歩み	
■ 北江川橋との出会い	2 ~ 5
■ ハイブル・クラス	6 ~ 10
■ 米と塩	11 ~ 14
■ ヴォーリス合名会社	15 ~ 23
■ 不可能を実験してみる熱情	24 ~ 30
■ 北江兄弟社	31 ~ 36
第2章 ヴォーリス建築事務所	
■ 番仕としての建築	37 ~ 44
■ 組織者・ヴォーリス	45 ~ 53
■ 大丸百貨店	54 ~ 59
■ 大正という時代	60 ~ 63
■ ヴォーリスとレーモンド	64 ~ 74
おわりに	75 ~ 77

— はじめに —

今日、建築家“ウィリアム・メレル・グォーリス”の名を知っている人は多くないだろう。しかし、グォーリスという名は知らなくても《世界の家庭用備品、メンソレータム》は広く知られている。そのメンソレータムの包装を見ると“近江兄弟社”という文字に気づくにちがいない。グォーリスは、その近江兄弟社を築いた人でもあり、そのメンソレータムを日本に販売した人でもある。

私は建築の卒業論文に“家庭用備品”の語を書いて薬学の論文にしてしまっただけなのではない。しかし、この家庭用備品メンソレータムのことを書かないで、建築家“ウィリアム・メレル・グォーリス”のことを書くことはできないのである。なぜなら、家庭用備品メンソレータムが日本全国に販売された働きと、建築家“ウィリアム・メレル・グォーリス”の建築設計の働きは外側においては違う働きであるが、内側においては同じ基礎の上に同じ精神に貫かれ存在していると思うからである。

建築家“ウィリアム・メレル・グォーリス”は戦前の30年という短い期間に、全国に2千近い数の建物を設計している。それも近江川橋というびわ湖畔の付田舎を拠点としてその働きを成しているのである。しかも、驚くことに“ウィリアム・メレル・グォーリス”は建築の教育を受けたことがないのである。どのようにして、この悪条件を乗り越えて全国に2千近い数の建物を建てることができたのであろうか。

まず1章において、グォーリスを支えた精神を中心にして彼の歩みを述べ、彼にあつての建築の位置づけをもしてみたい。そして、2章において、建築のことを中心に、作品を取りまぜグォーリスの建築の意義を述べてみたい。

第1章 ヴォーリスの歩み

『近江い幡との出会い』

日露戦争の真最中、旅順口が落城して血生ぐさいお正月を迎えた明治38年(1905)のことである。その2月2日は、北風の吹く日であった。午後の4時過ぎには、すでに太陽が比良山のかはたに雲がくれして、薄ぼんやりした空の下、寒風は守土の城址と頂上に突きでた幹島のすき間より、一陣も、二陣も、いや間断なく、野中に林しく立っている上り下りのプラットフォームを連絡する陸橋もないところ、ぼけは「近江い幡駅」に、吹きつけていた。その時、列車が到着した。わずかばかりの旅客が乗り降りする混雑の中に、立えりした縹緋色、格子じまの着古びたオーバーに山高帽、古いカメラを肩から斜めにつけ、白人種特有の美しい歯を出して、林しく微笑しはがら立っている。耳のこゑは18とも22とも判断のできぬアメリカ人がおった。

彼は前夜、東京を立って一晩、車中で明かしたのである。その5日まえ横井に上陸したばかりで、この国のことは、ほとんど知らず、ましてこんは田舎町のことは、かにもく知識がはかた。ただ、ひとつ確かなことは、この町に男子の高校があって、彼はそこで英語も教えることには、こいた。

彼のポケットには、わずか数ドル、それで最初の月給をいたぐくまで食い継がなければならぬ。彼には、この町にも、この県下にも、いやこの国中にたれひとり知り合いがない。強いてあげれば、つい先日、東京と横井で行きづりに合った数人がいるだけであった。彼はまさに借金を背負って夢に見てきた冒険に入ろうとしていた。ここまでの旅費を借金してきたので、それは月々の給料から返していかなければならなかつた。彼は長時間暖房もない列車にゆらけて、骨の髄まで冷えあが、てしまっていた。

駅のホームで彼を迎えたものは、身を切るような北風と礼儀正しいといつて、わざとらしくはい日本人の英語教師であった。この先生は学校に案内し、その足で川土は民家につれて行、た。そこは彼の宿舎にあてられていた。

町は駅から数キロ離れていて、松林の影から、かすかに望まれた。それは
山さな古びた町で、彼が夢みてきた所とはおぼろ織素いものだった。

『わたしは、とうとう日の出る国へ来た。湖畔の商業学校と中学校に教
るためだ。日本語はまだ3日前に横浜に上陸したばかりだから、オハヨー、
サヨウナラをけしかねない。来てみたらこんな田舎、寒い、淋しい、孤独
だ。近江の国は人口80万と聞いてきたが、アメリカ人は、わたしのほかに
ひとりもない。英語を話す人もいそうではない。日本は日の出る国ではない。
日の入る国の方だ。い、そこで、列車で横浜へ行って、船に乗って、帰
てしま、たほうがいい。』(1)

これがヴォーリスのびり湖畔の町"近江八幡"との出会いであった。ヴ
ォーリスは深い失望を、八幡駅のプラットフォームで感じたのである。それ
は、東海道線"近江八幡"に夜中または朝早く下車した日本人のせいだが、
実感することである。なにしろ、八幡町はその姿を見せないので森の影にある
し、駅から町まで両側がたんぼの一帯道を2km ほど行かねば町の入口につ
けはないのだから。

暗い夜に坐りこんだヴォーリスは淋しかった。

『わたしは、金があつたらすぐ帰るところでした。世間の手前もなにもか
まうことはない。失敗して逃げ帰ったと言わねども、甘んじて受けよう。
極東の日本の片田舎にひとりで暮らすのはたまらない。ホームシックネズ
だ。しかし、ありがたいことには、そのとき金がなかった。わたしは、借
金までして旅費をこしらえて出て来たのだから』(2)

ヴォーリスの手荷物を入れたトランクは鉄道院(現在の国鉄)の手廻りか
ら、八幡に到着後3日も、どこに行、たのか行方がしねなかつたことも、ヴ
ォーリスの打撃であった。

『わたしは、小さい手がばんこつて、はじめの3日を暮らしました。せめ
て荷ほどきでもして気を晴らしたいと思っても荷物はなく、することもし

く、森しさに包まれて、聖書を手にして、お祈りをしてください。そして、わたしの一生にかけ、経験したことのほいほいと、神との交わりを結みました。』(3)

このように、ヴォーリスを日本のいざは出合助に类させたものは何であらうか。若き24才という青年が、ひとり、たれも頼る人のいない日本に、なぜ来なければならなかったのだろうか。ひとには、その行動を起こさせるに至る動機があり、その支えとなる精神がある。あたかも、自動車のエンジン、火花でガソリンがスパークによって、激しく爆発し、熱い火を燃やしているのが、ボンネットで覆い隠されて、その自動車は調子よく走っているようにしか外部には見えない。けれども、その自動車が調子よく動くまでに、精密な部品を組み合せがあり、秩序があり、順序があるのだ。

ウィリアム・メリル・ヴォーリスは1880年(明治13年)10月28日、合衆国カリフォルニア州のサンフランシスコの母方の祖父の家で生まれた。ヴォーリスはオランダ系とイギリス系とフランス系の3つの血統をもっている。父方の「ヴォーリス」というのはオランダ系。イギリス系は母方の「メリル」家である。そしてフランス系はこの両系に流れている血統である。ヴォーリスは、母方の祖父が副教師をしていたサンフランシスコの長老教会で洗礼を受けた。7才の時、一家はアリゾナ州のフラッグスタッフという新興地へ移った。さらに1896年にはロッキー山脈を横切ってデンヴァーへ移った。ここでヴォーリスはイーストデンヴァー・ハイスクールに学び、1900年に卒業した。

彼はさらに進んでMITへ行、て建築院になることを志望していた。しかし、ひとつの生涯の転機が彼を捉えた。それは1902年にトロントで開かれた学生宣教委員団の大会出席である。多くの代表候補の中から、たどり着き選ばれてカナダへ派遣されたヴォーリスは、この大会でキリスト教の宣教活動においてもっとも著名な2人の人物を知った。そのひとり是中国におい

て伝道活動をしていたドソン・テラー夫人であり、もうひとりは合衆国のキリスト教界の大立者と、YMCAの大先輩であるジョン・ポール・モットであった。若きヴォーリスは、これらの人々の講義を聞いてつくづく感動し、外国伝道を生涯の道として選ぶ決意を固めたのであった。当時、彼はコロラド大学に在学中であった。

1904年に大学を卒業するや、直ちに外国伝道の場合をYMCAに求めた。そして、ヴォーリスはコロラド、スプリング市のYMCAの副主事をしたが、自分の外国での任地の決まるのを待っていた。半年ほどして、YMCA本部からの紹介があった。それは彼の希望として申し出た条件に添うぶりは、未だ宣教師のいっただことのない日本の中部の出谷町近江川幡の商業学校の英語教師の仕事であった。

任地が決定すると、自くヴォーリスは日本行きの準備に取りかかり、デンバーの両親の家でその年のクリスマスと新しい年の元日を過ごし、2日に出発、長い旅の後、遂に1905年2月2日、寒い冬の風の吹きつける午後、独りで新しい近江川幡の町に着くのである。

したがって、ヴォーリス自身、最初から日本の近江川幡を選んだのではなく、かたし、また、最初から英語の教師が目的ではなかったのである。ヴォーリスが日本へ来た目的と動機はキリスト教の伝道であった。

真実に神に仕えた多くの基督者がそうであったように、ヴォーリスも又若き日に、神の聖旨にふみ、垂れさるがようにその聖なる召命に自らの一生を懸けて応答したのであった。

『バイブル・クラス』

メシル、ヴォーリスの来た頃の近江は賑わい満ちた田舎町であった。人口は1万5千余、しかも、その川沿いの町には30 いくつもの寺があり、古くからの川幡寺社のほしの域内に、織田信長の没後、安土にあった町衆を移転して作られた近江商人の町である。

そこに県立の商業学校があった。ヴォーリスが来る前まで大津にあったのも、近江商人の伝統と精神をより豊かに受けつがせようとして、この町に移したのである。商業学校としては、日本で4番目に古い学校で、明治政府になって、第一に出来たのが、東京の現・橋商大、次が現神戸商大、次に京都市立オー商業、その次に出来たのが、この学校であった。近江商人の本場にある学校というので、関西地方をはじめ、いろいろな地方から学生が集まっていた。

ここにヴォーリスが来るまでにも、幾人かの外人教師がいたのであるが、このような不便で賑わい田舎町に長く留まる外人教師はおらず、いずれも、1、2年で他に移っていったのである。

ヴォーリスが商業学校に来た時の一番はじめの授業のおじすが、古田悦蔵の著した『近江の兄弟』に乗っているのので引用してみたい。

〈「こんどの毛唐はヴリスという奴やなあ」

「ヴリスはさう巡査ということやけど、ヴリスはなんや、きみ」

近江川幡の町の南端にある粗末な2階建て2棟の校舎と、平屋の専ら客舎、そして生徒控え室と運動場、学生3百、教師20余り、これが滋賀商業学校である。

板に塗ったかきの装の多いがする2階の廊下で、晩白毛たちがこんな会話をしていた。

当時、24才のヴォーリスさんは、2年甲組と書いた木札のかかった教室に近づいてきた。2年の生徒は、とやとやと教室に入った。

「見てつけ」「礼」と級長がとばした。

がたがた音をたてて席につくと、教壇の上に 巧れた黒板を背にして若いアメリカ人が出巻を見せぬ白い純白のカラーに赤手はネクタイに舶来の背広を着て、にこにこして立っていた。

「ボーイズ、わたしは、きみたちを指導することを無上の光栄とする。英語の研究は、発音が第一、会話が第二、読書が第三、文法が第四です。わたしは発音と会話を教えるために遠いアメリカから船を渡って来ました。」

とは、まり、ひとつひとつ言葉を区切りながら話したが、30余名の生徒は2、3人を除いて外したような顔をした者がいない。チョークを取って言葉のうちにあった単語を、いさゝち黒板に書いたうえ、生徒の名前を出席簿でひろいながら、吉田を"ヨシキタ"、高橋を"タカハシ"、堀本を"ツクモト"と、ひとりひとり立たせて、黒板の字を讀ませてみたりした。

やがて45分も経んだ。生徒たちは本をとりて運動場に飛び出す準備をし始めると、奥席、ウォーリスさんはチョークをボックスの中にしまつて、

「I am lonely. Come and see me after school.」

と言って出ていってしまった。

「I am lonely. てなんやろ。きみ」

「lonelyは、淋しいというこ、ちや」

「放課後、遊びにこいというたぜ」

「行、えろか。ロードやグラウンドのとき 上級生の尻について毛唐のところに、行、たら、ヤソの本を讀ましゃがって、せんべいを食べせよ。だが、こんどのは若そうは異人やから、面白いかもしれんぜ」

「教師のくせに淋しいから遊びに来てくれなんて、そんなことを毛唐から聞くのは、今がはじめてやな」

「今夜、偵察に行、者は集まれ」

「行、こやれ、行、こやれ」

わいわい批評している生徒の中に、こんは話があった。そして、その晩、ヴォーリスさんの借している暗い家に、数名の學生が訪問した。

「お前から行け」

「いや、お前は英語が得意だから先に行、てくれ」

「Good evening と言ったらよいやないか」

茶の間から奥の 1 に墨をのぞくと、ランプのうつす暗い光の下に、ひとりぼ、ちで、フォークとナイフを動かしている影が、間仕切りの紙障子に写っていた。誰かが思いやと「グッド・イベニング」と下手に大きくど鳴ると、影は動いて障子が、す、と中から開いた。

「Hallo, Come in」と叫んだのは、赤色のスエーターを着けて上衣を脱いだヴォーリスさんで、にこにこしていた。

食卓の食器が片付けられると、その上に、アメリカの風景写真が積まれた。そして珍しい生徒たちに、ひとつひとつ面白い説明があった。さあ、アメリカのゲームをやろうというので、教壇合せになった、カリラ、フリンチ、ドミ、サビカ持ち出された。

生徒たちは、このアメリカの先生が、生徒らしく土座から見下すようなことをしないのに全く引き付けられてしまった。 > (4)

若いアメリカの青年ヴォーリスは大平洋を渡るにも借金をして旅費をつくらせて来ておりながら、11曜に到着するはり、ひと月めの月給から借しげもなく大金50 幾円を断髪して聖書を百幾十冊も買い込み、戸棚に入れておいて、自宅へやってくる學生たちに与えてバイブルクラスを始めたのである。

バイブルクラスの最初の夜の来会者は45名であつたが、たび重なるにつれて、その数は増し、一週二晩2クラスとして、出席者212名になった。これは商業学校の全校生徒の3分の2以上の数であつた。聖書と賛美歌は夜

だけでなく、学校の中へも広まった。生徒の多くは聖書と賛美歌をポケットに入れて通学し、学校の各所で賛美歌のコーラスが聞こえるようになった。半日も経たない内に、生徒の中から次々と花札を受けるものが出た。ヴァーリスの蒔いた一粒の種は早くも実を結び始めたのである。

それだけでなく、このバイブルクラスからヴァーリスを助け近江兄弟社の創立に始めから参加した吉田悦蔵や利田幸一郎が出るのであり、彼らはヴァーリスの生涯の協力者となるのである。

ヴァーリスは日本に着いて直ぐ、近江川橋に来る前、東京のYMCA同盟本部を訪ね、赴任についての指示を受けたが、その時、日本の田舎での伝道は困難であるから1年か2年の伝道で直ぐに改心者が現れなければならぬと、来て失望してはならない、と囁かされて来たのであった。

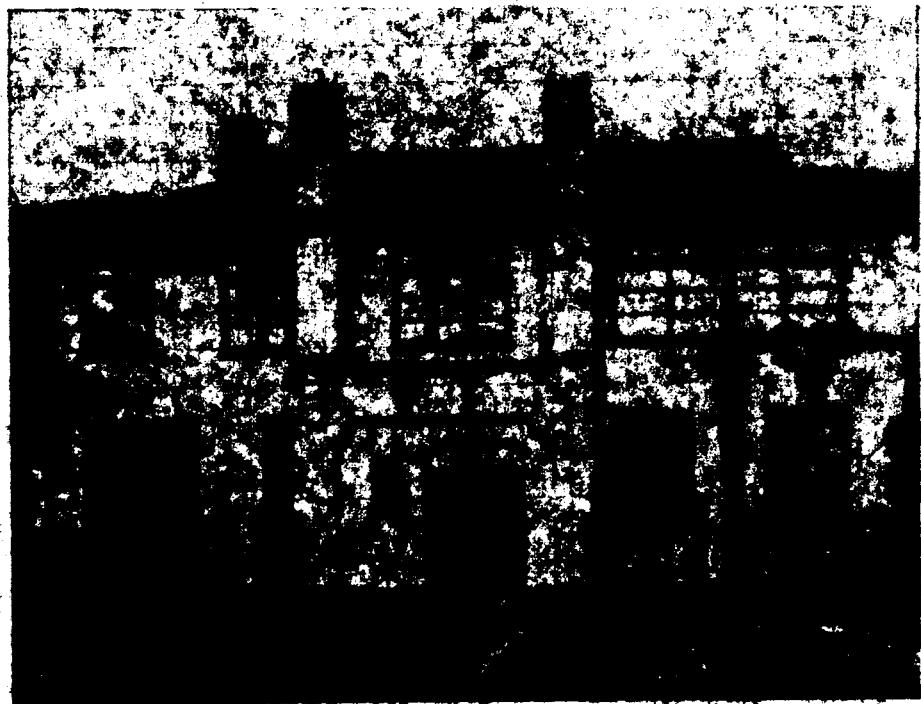
実際、明治30年代の日本は田舎のみではなく都会においても伝道の進展した時代ではなかった。それまでの欧化主義的風潮が明治憲法や教育勅語發布の頃から国家主義的風潮に変わり、以前の欧化主義の風潮の強さに比例して、その反動も激しいものがあった。こういふ時、しかも仏教の力の強い保守的で近江川橋で伝道しようという24才の大学を出たばかりの青年ヴァーリスの前途を気づかして、YMCA本部の人が、いろいろと伝道の困難を語って、成着が学ばないからといって失望してはならないと語ったのも無理はない。ところが、2年余りの間に人間のカヤ知恵を遙かに超える星がこのように起ったのである。

しかしまた、田舎町のしかも、西人を養成する商業学校、生徒の頃から近江商人の印であるといふので煙草は勿論、酒を飲む生徒の多い学校で、このキリスト教に反対が起っても不思議ではない。明治になって、西洋から来て来た新しい宗教、キリスト教が盛んになって、茶酒、茶煙、紙鴉片などが強く主張され、町からも、生徒からも、教師の間からも反対が起って来るのである。そして、それは次第に激しくなって、バイブルクラスに熱心なクリス

チャン生徒が、反対派の乱暴な生徒から殴りつけたり、ひとりの生徒は橋の上から川に投げ込まれに死した。

いろいろの事が二年間に起きたが、ヴォーリスの学生伝道は成長し、近江い幡に来た翌年の末には学生伝道の中心としてYMCA会館建設の計画が熟するのである。ヴォーリスが大学生の頃、ひとりの無神論の友人を改心させたが、その友人ハーバート・マンドリュースがヴォーリスの日本出立前に最後に見舞って幾日もたためのに遂に天に召され、その面親から息子の記念として送った基金を中心に、ヴォーリスの貯金もはたいて、YMCA会館の建設に着手し始めた。教会の信者のひとりが土地を提供し、設計はヴォーリスがした。そして11月に起工し、1907年(明治40年)2月に見成したのである。

近江い幡YMCA



近江い幡に最初のYMCAが建設されたのはヴォーリスがまだい幡商業学校の教師の時であった。つまり1906(明治39年)である。しかし現在あるこのYMCAは昭和10年のものである。敷地面積26,900坪、建築面積10,974坪である。

『 米と塩 』

京都から請負師を頼んできて、ヴォーリスの設計した青年会館は、工費3600円で40坪の2階建が2月初旬に完成した。

しかしながら、この頃から学生伝道はきつめて困難になってくる。商業学校の中では、東本願寺が後援する仏教青年会が盛んになってきたからである。そして新聞はさかんに近江川橋におけるキリスト教活動を諷刺する記事を掲載して、ヴォーリスやクリスチャン生徒を非難攻撃して、妨害していた。YMCA会館が完成しても、もはや一時のさうな大勢の生徒もなく、次第にバイブルクラスも縮小していった。

ヴォーリスの近江川橋で過ごした初めの2年間は、真に恵み益める時期であったが、又、その生涯のうちで最もきびしい2年間でもあった。そして、その最後に、今までよりもさらに、きびしい最も大きな試練に直面するのである。すなわち、ヴォーリスは学校では勝れた英語の教師と評価されたが、その余暇に余り熱心にキリスト教の伝道をしたというので遂に、3月に教師を解職されるのである。

学校長より外國籍教師ウィリアム・マレル・ヴォーリスにあてた解雇状は次のようなものだった。

『ウィリアム・マレル・ヴォーリス氏は西暦1905年2月より滋賀縣立商業学校に於て英語の教員であつた。其教授振りと學生の陶冶に關することは、全然満足するべきものであつた。同氏が解職されたのは、縣民の反對態度により、即ち聖書を教へて、學生達をキリスト教に到る様に感化したる事を以て、縣民の大部分なる佛教徒諸君の反對態度により解職したのであります。

學校長 I氏 自署 』 (5)

この2年間に彼のバイブルクラスに参加し、遂に決意して土地の川橋教会で洗礼を受けて基督者になった生徒は30人を起えるのであるが、その半数は前の年に卒業して各地に散り、彼が解職された3月にも残る16人の基督

生徒は卒業し各地に散っていくのであった。11幡YMCA会館の新しい大きな建物に、16人の同志が去ってゆくと、ほとんどヴォーリスひとりが残ることになるのである。賊人にな。こゆる学生YMCA運動のさだにおき発展のためへと、そのための寄付金も貯金もみなつぎ込んで町の中心に建てた会館であったが、ヴォーリスが解職された頃から、学生もほとんど来る者が絶えてしまったのである。ヴォーリスが外出すると「兇賊の異人」と、ののしる声さえ聞えてくるのである。

ただひとり、その日に卒業した吉田悦蔵がそのぶざまの試練に立っている先生のヴォーリスを見て11幡の地を去りかね、自分も一緒に先生とこの地に残って苦勞を共に負いたいと申し出たのである。吉田悦蔵はこの正仲間、ヴォーリスに最も近づいた生徒であった。ヴォーリスが近江11幡に来て直ぐ始めたバイブルクラスの最初からの生徒で、又、先生ヴォーリスの家に同居していたこともあって、最もヴォーリスに近づいた生徒であった。

吉田悦蔵の着した「近江の兄弟」はその時ヴォーリスの捧けた衆の祈りを伝えている。

3月25日卒業式を終って吉田悦蔵が会館に自分の荷物をまとめる心積もりで帰って来ると、ヴォーリスが吉田悦蔵を自室に招いて、解職の事実を語り、此後の決意を述べた。

『わたしは、もう学校の教師ではありません。まゝ、あはたと一緒に学校を卒業したのである。私は、今、神様に祈りをもち、その大御旨をさがっているのです。わたしは11幡を去れば、京都の同志社や東京のYMCAは喜んで、私も迎えてくれます。しかし、わたしは日本のひめ湖畔に神の国の福音宣伝のため、命をすてたいのです。もちろん、11幡では一銭の収入も与えてくれる道はありません。』と語り続けて、

『しかし、わたしはあえて信仰の冒険をやります。そして、神にのみ頼って生きてゆきます。「神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、こ

らのものは、すべて添えて与えられるであろう。」と聖書にあります。わたしはそれを確信して、自分を捨てます。そして、わたしの一生を胡蝶の上に埋めましょう。」と語った。

そして、ヴォーリスは『学生の食料—一月分は寄宿舎で何程ですか』と問うのである。悦蔵が驚いて『4円50銭』です』と答えると『米と塩ばかりで一月一人の食料は何程ですか』とヴォーリスがさらに問うので、悦蔵が『飯と肴物としたら3円50銭位でしよ』と答えると、ヴォーリスはひきまがいて『天の父様、私に3円50銭を毎月与えて下さい。わたしは、あなたがそれだけを保証してくだされば、私のこの一身をこの青耳会館に埋めます。そして、びり胡蝶の福音宣伝に一生を捧げます。』と祈ったのである。

ヴォーリスは、22才の大学生の時、外国伝道への神の召命を受けて、一切を捨てて神に従った。そして、4年後、あの時と同じように神の真実を仰いで、この祈りに生涯の一切を賭けようとしたのである。その後の彼の一生の仕事となった近江兄弟社の出発と土日は、奥にこのひとつの祈りにあった。

吉田悦蔵は高野商業へ行くか、または、ある人の世話でデンマークのコペンハーゲン商科大学に入学するかの選択に迷っていた。しかし、ヴォーリスの真情と決意にふれて、YMCA会館にヴォーリスと共に住み止まろうと決心するのである。来月からの定まった収入の予定はもうないが、吉田悦蔵は毎月康から送金してもらっていた学費を引きつついて送ってもらうことにした。その後間もなく、当時日本を旅行していたアメリカの実業家がヴォーリスの解鞍事件のいきさつを聞いて、此後2ヵ月、毎月25ドル、日本円で50円、名を秘して送金して、ヴォーリスの働きを助けようとの申込みがあった。悦蔵が毎月康から送金してもらった17円、それに25ドル、50円、計67円をYMCA会館での2人の生活が4月から始まったのである。このようにヴォーリスに対して、各地の学校から（京都の同志社をはじめ高野学校から）商業学校以上の給料という条件で迎えに来たが、ヴォーリスはすべて

て断った。

ここで問題にしたいのは、この数年間の出来事がヴォーリス 80 歳の生涯にとって何を意味するかである。この短い数年の最初の出来事は「ヴォーリス」にとって単に甘んじたい思い出ではない。

ヴォーリスが 70 才を超えた 1951 年（昭和 26 年）から数年にわたり兄弟社の月刊紙「珊瑚の声」に連載した「自伝」を見ると、最も詳細に又、いきいきと記録しているのは 11 年商業学校英語教師として赴任した 1905 年（明治 38 年）2 月 2 日から 2 年後、3 月教師の職を解かれるまでの 2 年余りの間の記事である。この 2 年間の出来事が、自伝全体の 3 分の 1 以上に及ぶのである。それは、この時期がどのように強い強烈な思い出として、長い一生、忘れ難いものであったかを示している。それまでのヴォーリスの半生は、後の半生で成されようとするこの準備であり、その後 80 歳年及ぶ後の一生は、この 2 年間の出来事を土台として築かれるように見え、後はこの 2 年余の間に生涯の働きのための土台を作り上げた。後の生涯の事業となった近江兄弟社の精神的な土台も又この期間に形成された。

旧約聖書に出て来るイスラエル民族の千年の歴史にも、そのような時期があった。それは、この民族がモーセに導かれてエジプトを脱出し、40 年アラビアの荒野を放浪した期間である。それは、まことに恵み深い神の召しであると共に、きびしい荒野の試練でもあった。それは、又きびしいが恵み深い神の教育でもあった。この時期に、この民族の精神と千年を超える伝統の基礎が築かれた。ヴォーリスは、トロントの学生宣教委員会の大合の、聞いた神の召命に自分の一生の真実を賭けて応答、近江一帯に来たのである。それはミデアンの野で神の召しを受けたモーセのエジプト脱出にも似た行為であったのではなかろうか。そして、それにつづく数年間の出来事は、この青年ヴォーリスの一生を賭けた信仰の真実に対する神の恵み深い答えであった。

『ヴォーリス合名会社』

ヴォーリスは明治40年4月、教師の職を失、翌月から、以後、彼の一生の間発刊しつづけて、アメリカ、イギリスその他世界の各地にある友人知人に送りつづけた「マスタード・シード」第一号を出して、故国の友人知人に手紙として送った。

「マスタード・シード」とは、「からし種」の意で、次のような名高いイエスの言葉に由来する。

『天国は、一粒のからし種のおうなものである。ある人はそれをとって畑にまくと、それはとんぼ種よりも小さいが、成長すると野菜の中でいちばん大きくなり、空の鳥が来て、その枝に宿るほどになる。』マタイによる福音書 13章 31～32節

イエスは一粒の譬えによって神の国の秘密を語らねるのであるが、この「からし種」の譬えによって、目に見えぬほどの小さい一粒の「からし種」にも、神の生命が宿っているのだ、無用大は大ききまにまで成長するのであると、また、真実の信仰と祈りにある業は、如何に小さく目立たなくとも、それには無限の神の可能性が含まれていると教えるのである。

ヴォーリスはこの信仰を持って、友人知人に「マスタード・シード」を送った。まじ、その月から卒業して各地に散ったクリスチャンの生徒達には、騰写版を使って、毎月日英両文の「月報」を印刷して送り始めた。そして、また、ヴォーリスはこの期間に建築設計の練習を始める。22才の大学生の時、外国伝道の召命に応じ、建築家になる志は一切捨て去って、大学の羅文科に移して卒業したのであるが、本来好きであつた仕事なので、趣味のひとつとして暇な時には図面なども引いていたのであるが、この頃になると、方々のYMCAや宣教師から、西洋建築の技術者の少ない当時の日本で、建築にもくわしく図面も素人離れした晩を持っていたヴォーリスは重宝がられ、相談に乗ったり、設計図を書いたりすることが次第に多くなっていくのである。

った。

そして明治42年(1909)には京都の三条柳馬場に、ドイツ人デラランの設計になるキリスト教青年会館が、アメリカのワナメーカー氏の寄贈として京都を飾ることとなり、その建築が始まり、たのびヴォーリスはその監督として雇われ、週3日勤務という条件、月百万でその任に当たることになった。毎日、セメントの粉末や壁土、木屑、レンガの破片の堆を散る中で、日本の職人や土着を相手にして、若いアメリカの青年ぶりを発揮した。吉田悦蔵もそれを手伝った。打ち込んでやる仕事が決まるとヴォーリスは、その目的達成のため、猛烈に働き出した。

その時分のヴォーリスの生活振りを吉田悦蔵は「北江の兄弟」に次のように書いている。

『この時分のヴォーリスさんの生活振りは奥に昔の勘察りにある。フランシス・ガビエル師の様であった。筆舌に尽んだくいの”K”の奥床にもぐり込んで寝る位は朝飯前のことだし、弄取なんか一面お構いはなし。所謂、おり振れも施れて、その青春の時代をただ一筋に、建築の設計監督を職業として成り止まぬ強い強い鉄の意志が働いて居た。思えば一心不乱の奮励の如く、たゞ神の国の秘案を夢みて、難境に処したヴォーリスさんは奥に神々しいと言うより外なし。』

その頃から、ヴォーリスは京都YMCAの仕事のみならず、広島廿四校、東京廿五キリスト教青年会館の建築設計などいろいろな方面からも依頼を受け、建築家として次第に世に認められかけて来ると、自分は直接、湖畔の村々に伝道する暇がないからと、日本に英語の教師として来ていたアメリカ人ラッパ氏を給料を出して迎えたり、又その年の春には、東海道の要所、大津の馬場と米原に11の宿屋を見つけて、2人の青年幹事を雇い入れ、伝道職員のためのYMCA事業を始めるほど、伝道方面の仕事に、その建築で得た収入を捧げた。

また、建築の仕事が多くなり、そして、仕事に献身でありはるほど、建築教育を受けていながら、バウリスは、自分の限界を感じた。そこでバウリスは1960年(明治43年)に三バリア経由で帰国し、コーネル大学出身の建築家千エーピンを連れてくるのである。そして、ついにバウリスは明治43年(1910)に、商業学校で教える、古田悦蔵と村田幸一郎と、アメリカから連れてきた千エーピンと共に『バウリス合名会社』を設立した。そして、1911年(明治44年)6月には近江川幡町元にて建築事務所を新築したのである。

一方、今までのようにはバウリス個人の努力による湖畔のキリスト教事業は、形を整える必要がでてきた。そこでバウリス、古田悦蔵らは、明治44年(1911)に『近江キリスト教伝道団』(近江ミッション)という名の団体を組織したのである。それが、いわゆる『近江兄弟社』のはじまりである。

その『近江キリスト教伝道団』の綱領として、(6)

- 一、近江の国にて教養に關係なくキリストの福音を説く。
- 二、教会は設立しない。伝道だけする。
- 三、日本人も外国人も風俗習慣の別、国籍の別、人種の別などを區別せず、に共同生活をなし、完全に一致する団結を実現する。
- 四、他の福音宣伝事業をやっている処に行かぬ。
- 五、農村、漁村の伝道をやる。
- 六、病者の養成。
- 七、酒とたばこは害悪と認める。結婚の向上、体育と衛生の進歩を図る。貧乏問題の解決をする。

(11. キリスト教の宣伝については前人未到の地に行き、

と、いふようなものを掲げた。

そして、この団体に精神的運動の指導者として、京都同志社総務長、市教

主任の地位にあった牧師、武田猪平を近江に迎え、サ根牧会と協同して彦根に駐在してもらった。そして、い幡と呼称して朝鮮伝道にあたることになった。

1912年にはると創立者のひとり、村田幸一郎はアメリカへ帰国した。そして、日本で発病したヴォーリスを療養のためアメリカへ帰国させる代りに、村田幸一郎はJ. H. ヴォーゲルという若い建築家を見付けて、日本へ行くよう交渉した。ヴォーゲルは外国でキリスト教の宣教師をしたことがニューヨークの学生義勇宣教師本部へ問い合わせ、本部の命令を待っていたので、すぐに村田幸一郎とヴォーゲルの交渉はまとまった。1913年(大正2年)1月、ヴォーゲルは日本へ向けて出発し、入れ代りにヴォーリスは病氣療養のため、5月アメリカへ帰国した。

翌年、ようやく健康を回復したヴォーリスは、両親を伴い村田幸一郎といっしょに3月に日本へ戻ってきた。その時、ヴォーリスは近江い幡に大きな3つのおみやげを持ってきた。ひとつは友人A. A. ハイド老人の寄贈された朝鮮の伝道のための福音船ガリラヤ丸であり、もうひとつはハイド老人の所有するメソリレータムの日本販売権であった。そして最後に、い幡山のふもとに建てられるべき、肺結核療養所の建築資金であった。これらは皆、大きく近江キリスト教伝道団の前途のために役立ったのである。

この団体に参加した武田牧師が中心となってガリラヤ丸で朝鮮伝道をするようになると次第に同志は増加し、ますます、ヴォーリスを中心としたこの団体は大きくなっていった。この頃の日本は、明治20年代から始まる、国家主義的傾向から、40年代のはじめ頃にはようやく抜け出し、世界に目を開く開明的な時代、それにつづく、大正文化の時代、大正3年に始まった世界第一次大戦も、日本にはむしろ好景氣をもたらした。戦後は世界的平和ムード、日本にも民主主義が叫ばれ、日本のキリスト教会も、ようやく苦悶を呈し始め、戦争の終わった大正7年から関東大震災のあった12年頃までが

明治に日本に播かれた福音の種が成長して、収穫期を迎えたとも言える最も
激勢のさかんな時であった。この頃までは、キリスト教は日本の革新の第一
歩をゆく新しい精神運動で、この頃の近江の伝道運動も保守的な近江におい
ても、全国的な傾向の影響を受けて、反対される向きもあったが、全体とし
て、表に乗って多くの処で歓迎された。ガリヤヤサでの伝道は郡内の町々村
々で、村民大会、婦人会、青年会、学校などで、二百人、三百人、時には数
百人の会衆にキリスト教の文化講義や精神講話をいたる処で、また、あちゆ
る機会をとらえてして歩いていたのであった。

この時期、ヴォーリスは、伝道や建築設計だけでなく、もっと広く伝道事
業としての産業に手をかける。そのひとつに、近江療養院（けなトリウム）
の創設がある。その療養院が附設されるまでに、いくつかの沿革がある。(7)

ヴォーリスが明治38年に近江川橋に来て間もなく3月のある日の午後、
数人の親しい教え子の生徒達と町の郊外を散歩して、川橋山に登ったことが
あった。そこは少々の段々畑と竹藪と雑木林におおわれていて、その中に細
い路が山に向かって通じていたが、その中をかきわけて登ってゆくと、いま
た雪が残っているのに、一匹のバツタが飛び出したのを、ひとりの生徒が見
つけて「ヴォーリス先生、バツタです。この処は冬でも暖かいのですね」
と告げると、ヴォーリスは「面白いものを見つけましたね……。私はこの土
地を農園にして、君達と一緒にアメリカの野菜を作ったり、鶏をかってみた
いです。」と答えたという。

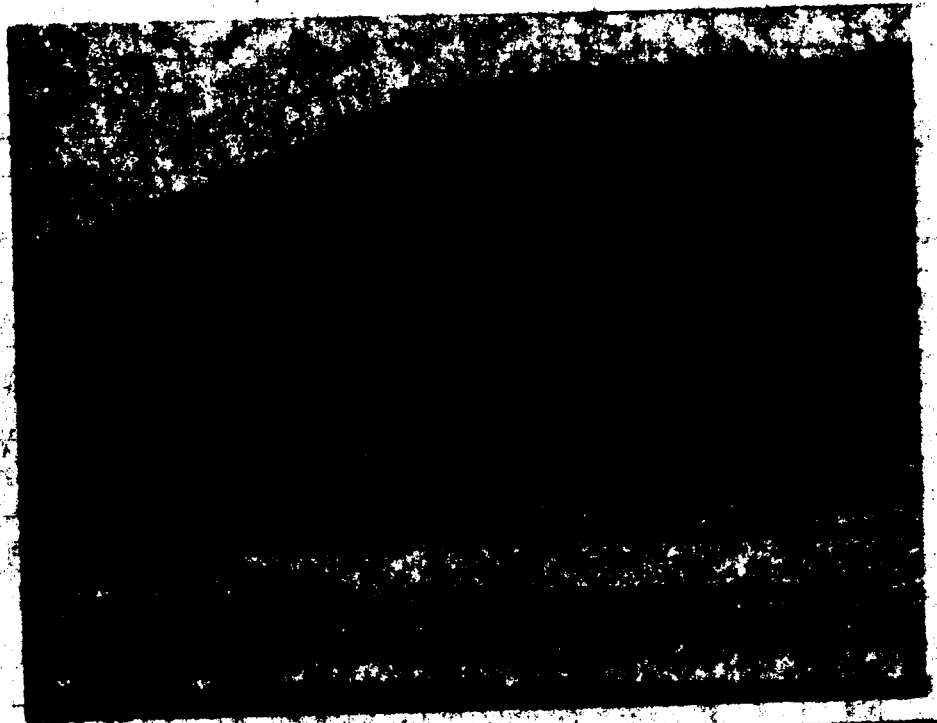
この処は北面に小さな山があり、反対の南東に向かって、なだらかはスロ
ープになっていて、見晴らしのよい日光のよくあたる場所であった。その
土地がそれ以来、ヴォーリスに施されぬ土地になったのか、その後、数年
が過ぎ建築事務所が盛んになって収入が増えくると、この土地4千坪を買
い取り、大正3年6月に、この土地に番付屋を建て「養命館」と名づけ、人
を雇って畑を作ったり養鶏などをやらせていた。そして、そのようなころ、

その土地に添って湖畔の岸にある長命寺にゆく道の側に、一軒の川さし無料
 休憩所を設け、湯木の飲めるようにしてあって、その壁にはキリスト教の架
 内を記しておいたが、ある日、遠藤願隆という、若い比叡山で修業中の僧が
 この休憩所の架内を見て、一幡のYMCAを訪ねて来て、遂にヴォーリス建
 築事務所ではばく働くことになる。それから、この若い僧は一幡教会で梵
 礼を受けて、この団体に働くことになったが、しばらくして、山での僧とし
 ての修業がきびしかったのか、肋膜炎から肺に病手をうつけ、この養命館で病
 を養うことになる。この養命館と百姓山屋との間に、一条の鉄橋がひかれて
 あって、夜でも昼でも用事がある時、鉄橋をひいて鐘を鳴らし、百姓さんを
 呼び起こすことにしてあった。しかしながら、彼は一度もそれを使わなれども、息
 を引き取ってしまうのである。

この出来事はヴォーリスを大きく動かすことになり、ひとつの直格の原因
 となり、大正7年(1918)近江森養院が開院されることになるのである。

本館3階建の木造の建物や、それととりまく幾つかの療養のためのコデー
 ジは、外国からの寄附金によって建てられた。そして、設備、その他、大半
 の費用は建築事務所の収入から支出された。

近江サトリウム温泉

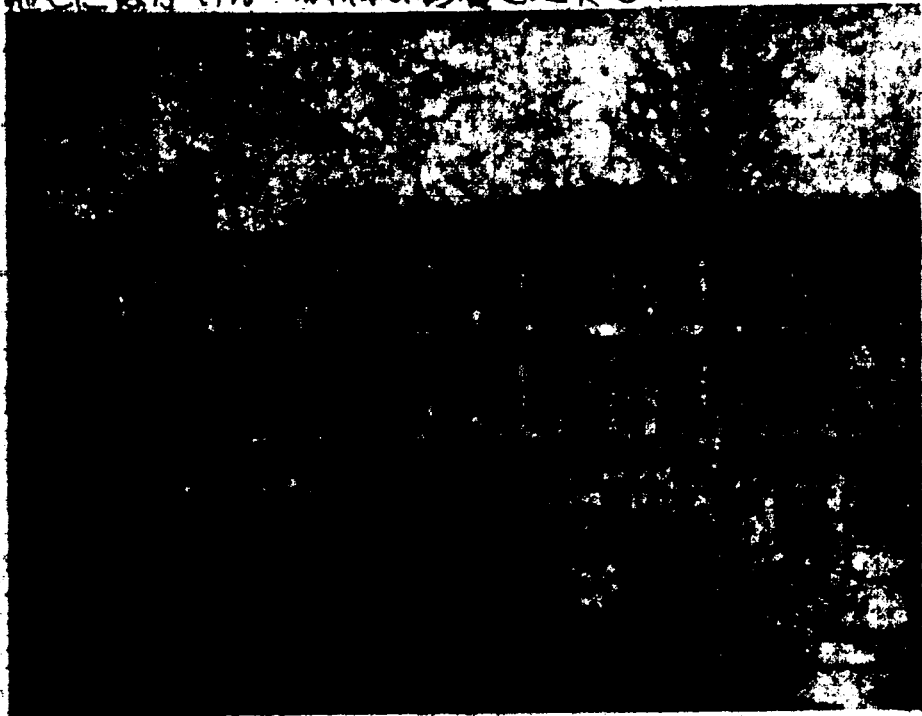




近江サナトリウム (ヴォーリス記念病院)



近江サナトリウムが最初の施設の建設により、開院されたのは大正7年(1918年)であり、以降次々に増設された。開院以来早期結核に対するサナトリウム療法を実施し現代の結核療法に対する最も合理的な基準を実施したばかりか、精神の修養も加美した。



上>大正7年(1918年)に完成した正面入口の玄関棟をみる

下>昭和16年に完成した新棟の外観をみる。

大正7年、福音の宣伝各施設、近江サトリアムの事業を一切まとめて『近江基督教慈善教化財団』とした。

この頃の最も人数の多い部門は建築部で、始め、2、3人で始められたのが、チーピンが加わり、公の型を取るようになり、また44年には村田幸一郎の川幡商業の同級生、佐藤久勝が参加、やがてこの人はこの部門の美術方面担当のヘッド、デザイナーとして大切な技術者になった。このような初期の建築部員は大部分、メレル、ヴァーリズを先生にし、働きつつ学んで一人前の建築家に成長して行くのである。次第にこの時興は建築事務所が世間に知られてくると、地方の工業学校建築科の卒業生が入所を希望して来たり、大正10年頃には専門学校や大学の建築科の卒業生も参加してくるようになり、それから可成り後であるがラubeこそはアメリカからの建築技師も参加するようになった。建築の依頼は日本各地のみならず朝鮮支那にも及び、大阪と東京に出張所を置いたりした。大正14年発行のヴァーリズ著英文 "The OMI mustard seed" 5版によると、それまで設計した住宅、164、学校118、教会やYMCA 114、商社24、時に大正11年起工、3年近い歳月と当時の費用400万円をかけて、大阪土版堀の一角に建った10階建50坪の大建築 "大同ビル" のことが書いてある。"大同ビル" は当時、大阪における最も大きな美しい建築として、天下にヴァーリズ建築事務所を知らせ、その本拠は川さし田舎町の近江川幡にあったが、第一級の事務所と認められるようになった。この頃の部員は32人、メンバータムで利益が挙がるようになるまで、この部がこの団体の経済を支える中心であった。

『不可能を実験してみる熱情』

現代の伝記物の中で、主人公の少年時代のことを述べた逸話ほど面白い箇所はないものである。それは、その部分にこそ、その人の将来の生涯の性格と計画が縮図のように、魅惑的なまでに単純な形で見られることが多いからである。

次にあげるのはヴォーリスの高校生時代の出来事であり、ヴォーリスの性格をよく表わしている逸話であるので、「失敗者の自叙伝」より引用しこめる。

『高等学校の教育過程の中で、私の全生涯にわたって革新的な印象を与えてくれたものは、植物学の学習に関して起った一事件である。私たちの植物標本の採集のために、私たちは幾たびとなく田舎に出かけにリ花や葉や根をどこまでおしつけて、白紙にすることで多忙であった。植物の根や芽の発芽と成長の状況を親しく観察させるために、先生はひとつの宿題を出された。それは南瓜の種を根、土の中の中で発芽させて、根の成長の程度をインゴにしろしをつけるのであった。後には、えん豆をも同様にして発芽させる実験をしたが、その次には、木を入れたコップの上にかや布を張り、その上に発芽したえん豆をのせて茎は空中へ、根は木の中へ成長させる実験をした。この実験は、最初の葉がでる時まで継続すればよかったのであるが私は実験の過程の中に、非常に興味をそそられたので、その後をやめずに続けてみた。茎が5、6寸の高さになった時花が咲いた。それで、私は「コップごと大車に包んで学校に持参して行き、実験を先生やクラスの友人たちに見せた。コップの木は絶えず補給して一杯になるようにしておいたが、このときはさびみきって茶褐色になつていった。先生は実験の結果をほめて下さった。しかし、「何分にも土が甘いので、花は咲いてもそれ以上の成長する気ずかしいはなく、やがてしおれるに違いないと申された。先生の予言は私をかり立て余分の努力を払わせる結果となり、それには母も熱

かして、私が学校へ行って留守のときなどは親戚に世話をしこくした。
私はこのコ・プを南の庭の敷居の上に置き、天気の良い日には、窓の下部
をあけて、植物が日光や空気を十分にとれるように気をつけた。やがて川
豆は莢ができてきたので先生に報告した。先生は、その植物が植わずに生
きていることを聞いてびっくりしたようだ。莢には2カ所ほどのひくさ
みができ、だんだんと成熟してきた。この過程のとき、私はそれを大塚に
学校へもっていったところ、先生は「豆ができたところで、どうせそんな
ものは発芽しないよ。」と言われた。そう言われると、ますます試してみ
たくなかったので茎が枯れ莢が黄ばんで、乾燥するまで大切に保護をねえた。
そして最初の莢の中にできた豆を用いて、前と同じ実験を繰り返してみた。
すると、その第2世の豆粒は、立米に発芽し成育していったばかりか、茎
には莢ができて、その中には第3世の豆粒が立米に結実するに至ったので
ある。

先生は喜んでくださったというよりは、むしろ自分の知識と独断がとつ
かえられ、その鼻柱がくじかれたので、いくぶん不機嫌の様子であった。
この先生が、もし研究に熱心で進歩的な考え方であったなら、先生と私で
幾十年かの昔に水耕農法を発明して、ひと財産を作っていたかもしれない。
そうした場合には先生の学説はくつかえされなかったかわりに、私のラ
イフリークの方はくつかえされていただであらう。

私がこの経験で得たことは「不可能」といわれていたことを実験してみ
ることに対する熱情であった。その後、30年たったはいうちに、たいて
いの発明は素人によってなされることかわかってきた。専門家はあまりに
も多くの事を知りすぎているので、彼らは自分たちの理論や原則によって、
そういうことはできないと容易に判断する。ところが素人にはそれがわか
らない。だからできるかやってみて、できるということを見出すのであ
る。キリストを見出したのは、教会の神学博士ではなく田舎の漁夫たちで

あった。』

この出来事はヴォーリスの生涯を裏づけするような事ではあるまいか。けれども他人のいはい近江川橋にやってきました。教師を解職されても近江川橋に留まり、実務建築教育も受けていはいのに設計活動をする様、また米利、大塚の馬場建築委員会を作る様、そして、天台宗の一僧を招き近江斎養院を開院する様はまさに「不可侵」といわれることに対しての信仰的冒険なのである。

ヴォーリスは大正9年(1920)に今までの「ヴォーリス合名会社」を解散して、新しく「近江セールズ」が設立された。この部門の出来たのは大正9年という事柄であった。ヴォーリスが明治42年、建築事務所を始めて以来この方面の活動も盛んになってくると、その建築が洋風であることが多く、とりわけ、出来上がった建物の設備や家具、インテリアなど、日本では手に入らない品も多く、アメリカから輸入して、建築の依頼主の注文に合せねばならぬ。建築部の附属部門として、金物、家具、インテリア、ペンキ、その他に関係する種々の輸入、それに内地で出来た品物などもあつた。本拠は近江川橋にあったが、大阪と東京には建築部の出張所と同じく、近江川橋の名義での川橋からの出向社員が現地で雇った日本人の人々と活動していた。大正14年の名簿によると、正式の社員はこの部門で9人であった。同時にOSCのマーク入りの建築金物が使われていたが、このOSCはOriental Sales Companyの略である。後にOSC建具金物工場が完成して、金物よりも早く近江川橋のHard-wareをつくり出して広く用いられているところである。しかしながら、現在はOSCの金物はつくられていない。ヴォーリスは、その影響を建築に始めるのも早い、早く決断をするのも早い。世の中の動きに目を見はり、先手を打っていく。しかし、この建築部の成り立ちは吉田悦蔵の巧構が大きく各界での吉田悦蔵の働きが巧を奏しているのを忘れてはならない。

ヴォーリスの事業を成り立たないものは"ハーモニドオルガン"の輸入と普及である。ヴォーリス自身、日本へ来る前には教会でオルガン弾きを担当していたほどの音楽愛好家であった。1935年(昭和10年)に帰国した時に、ハーモニドオルガンの社長と会い早速一台を買って菟田丸船上に持ち込んで大平洋をハーモニドオルガンを弾きながら渡ってきたのが、日本へハーモニドオルガンが入ってきた最初であるといわれている。それ以後、ヴォーリスはそのオルガンの輸入販売を一手に引き受けたのである。

また、ヴォーリスの事業で、あまりにも有名なものにメンソレータムの販売がある。メンソレータムはアメリカのA. A. (アイド)が発明をした。ヴォーリスがアメリカに病氣療養のため行ったとき、近江の宣教師のためにと、福音船がリウヤ丸と共にメンソレータムの販売権をいただけてきたのである。

A. A. (アイド)という人は、アメリカにおいて1884年頃、不動産売買の商売でとてほかの成金者となった。しかし、そのころの財界不況のため、こごとく財産を失うのである。その時、家族は8人、孫子10人の大家族であった。ウイキタ市の青年会館の建築費3万ドルを寄附する約束をしたが、完済しないうちに、パニックが襲来してきたのであった。彼は神と約束したこの寄附申し込みを果たすために、最後に残っている家屋敷はもちろん持ち物の目ぼしいものまで全部売りわたして、YMCAの建築資金寄附の約束を果たしたのであった。そして、裸一貫になつて裏長屋にひび住居をしていくとき、苦心さんたん、製薬の大発明をしたのが、世界的に有名な家庭薬メンソレータムである。これには、いろいろな貴重な薬品が混入されているが、メンソール(は、か)とカンフオール(しょうのう)も含まれている。そしてこのふたつとも不思議に日本の産物であった。製業者となったA. A. (アイド)は創業の時に神様と約束をした。メンソレータムの売り上げの利益の一部を神様に捧げましよう。そして、それをキリスト教宣伝、社会教育などのために寄附ましよう、と、確心に誓つたのである。商売は次第に思ひ来て、

利益があつたので幾十年の間に、毎年利益の十分の二、三、四……をとして、とうとう十分の九までも献金して十分の一で生活費が十分にまかなわれたのである。

ヴォーリスはこの菓の売り出しに努力してみたが、廿一年に相手にされなかったが、大正九年、東京で開催された世界日産物輸入会で吉田院蔵と知り合、三井物産の販売部門の専門家、佐藤忠太郎が、その翌年意を決して、この団体に参加、居まい藩に移し、メニソレータムの販売に専心するのである。初めは一人、二人で販売していたのが、日本中に知れ渡ると販賣が増大し、最初は輸入して販売するだけであつたが、昭和六年(1931)にメニソレータムを製造するための工場を川崎の所に作るのである。それ以来、メニソレータムは若奥に日本中で愛用されるようになっていった。そして、ついに第二次大戦中、このメニソレータムは軍需品として、全国津々端々にまで用いられることになる。

また、ヴォーリスに關して記しておかなければならぬこととして、彼の大きな第2の転機のことがある。その第2の転機とは、日本国籍を得て、帰化したことである。その時期は1941年(昭和16年)1月、つまり、日米開戦の直前であつた、この時よりヴォーリスの名は、夫人の姓「一柳」と名乗リー一柳米来留(ひとつやはまめりる)とほつた。

夫人の一柳家は豊臣恩顧の大名で關ヶ原では西軍に属し、ヤヤ藩主小野2万石の領主であつた。ヴォーリスとの出合いは大同生命ビルの工事の時であつた。アメリカ歸りの若喜子は、たまたま大同生命の社長と親戚であつたので、若いアメリカ人の建築家の設計というので、現場に訪れた。これがき、かけで2人は結ばれた。しかし、結婚するについて周囲の反対は大変なものであつた、華族の娘が国際結婚をするといふので、当時の世論を沸かせたのである。しかし、2人はあつはる障害を越えて結婚した。それは1919年(大正8年)6月3日であつた。これ以後、若喜子夫人はヴォーリスのベターリ

ーフとして大きな力となった。教育方面における彼等の活躍はめざましいものがあった。現在の学校法人近江兄弟社学園は幼稚園から高等学級まで一貫してキリスト教精神に基いた教育が行われているが、その中心となっていたのが彼等である。

在日アメリカ人の中で戦争状態の気配が濃厚となった時に、日本への帰化を決定した人はほとんどいなかったといえるだろう。それを取って実行したヴォーリスはやはり、信念の人であった。すでにヴォーリスの両親も近江い幡の地で昇天し、長命寺街道にむくた江の中腹の恒春園納棺堂に眠っていた。したがって近江い幡はヴォーリスにとりて第2の故郷だったのである。ある意味では、第2次大戦はヴォーリス自身とは何ら関係ないことであった。たとえばヴォーリスがアメリカ人であったとしても――。彼は自分と長い間行動を共にしてきた人々と別れて、敵味方相争う国へ帰るよりは、住み慣れた町に留まることが当然のことだったのである。そのために、帰化して一柳米来留と名乗ったのである。

このようなヴォーリスの行爲がどのように他の人々に受け取られたかということは、いくつかのエピソードがそのことを教えている。戦争がなければ、重井沢の別荘にいた頃は、他の外国人は、(ヤシや牛乳の配給を受けながら、ヴォーリスは容赦なく外国人であるが日本国籍であるために一般の日本人並みの米の配給しか受けられず非常に苦痛した。また、大平奔戦争が始まると、メソリータムの製造は継続していたが、建築事務所の方は閉鎖せざるを得なくなった。もちろん伝道活動の方も下火には、こしま、下ことはいうまでもない。建築事務所には人は滋賀土建という会社をつくらせてそこで再び設計活動の開始できる日を待つことになったのである。それでも多くの人々は近江い幡を去って行った。

米系日本人としての一柳米来留について、すべての人が忘れているのではないにちがひとつある。それは敗戦後の占領下における彼の巧奪である。昭和史

の重要な一駒の出来事として、占領軍司令部 マッカーサー と天皇の会見があげられるが、これを実現させたのは一柳米来留であった。いかに米系とはいえ日本人になって戦争中にもアメリカに帰らなかったひとりの市民が、占領軍司令部と面会することだけでも相当は困難であった。面会にまで至るまでの一柳米来留の経度は、決して卑屈ではなく、むしろ毅然たるものであった。15分間ほどの時間なりという総司令部からの返答に対して、そのような短時間では重要な話し合いはできないからといって、さらに長時間の面会を申し入れたと伝えられている。このような一柳米来留の努力によって、敗戦の約1ヵ月後の9月にマッカーサー と天皇の会見が実現し、その後のく人間天皇宣言>が行なわれたことに、一柳米来留のニューマニズム精神の影響が現れていることは否定できない。この宣言はすべての日本人の生活感情の歴史において、最もエポックメイキングな事件であった。このことの意義については多くの歴史家や評論家が指摘するが、それを果たした一柳米来留についてはまったく触れられていない。とかく歴史において不合理な裏面は取り除かれてしまうのだろうか。まさにそれは昭和裏面史(ウラメシ……)なのだろう。

『 並江兄弟社 』

大正14年2月2日、ヴォーリスは日本に来て20年目の記念の日を迎えた時、彼はその時44才。産業活動の中心部門の建築部はこの間に30人まで起える最も大きい部門になり、これと共に伝道部門も次第に進展し、それに並江サナトリウム、並江セーラズ株式会社、大正7年、財団法人並江基督教福音教化財団が新たに組織され、並江サナトリウムや11箇YMCA、この種の教化伝道部門がこれに属し、法的には財団、ヴォーリス建築事務所、それに並江セーラズと3部門が整い、ヴォーリスの夢はもうやむ、その実現の土台を築めることが出来た。

この年の2月2日に100人に近い社員と共に席した記念日は、ことおぼが結構熱いものであったに違いない。その日彼は「20年を自分、費していた理想の目を以て、今日を見ると、寧ろ信仰も努力も当初に比して、甚だ衰頹していると感じる……」と声衆ともに下る下辞を述べたが、然しまたヴォーリスの伝記的著作「一粒のかかし種」に述べているように、川は「一粒のかかし種が、この20年間に思ったより早く、急激に一本の木に成長していくのを振り返って、驚きと熱い感謝を察し得なかったにちがいない。

ヴォーリスは勝れた同志に恵まれた。20年にして幾つかの奉仕部門を有する100人余りの社員のある独特なキリスト教伝道団を、八んぴな人口1万5千人余りの小さな田舎町を中心とし、しかも外国のどの教派とも全く関係なしに、作り上げたのであった。

さて、20年間に作り上げられた幾つかの奉仕部門のある時異な並江ミッションの根本を支える基本精神は一体なんなのか。何を祈念し、何を求め、この時異な伝道団を作り上げたのか。ヴォーリスは生涯一度も、この団体を支える根本の精神を、理論的組織的にまた神學と関係づけて人々に示すようなことはなかった。彼は生涯、聖書を読み信仰を日常生活に生かすことに心を注いだ一平信徒として一生を送った。彼は自分の使命を神學や理論の上に

あるとは思わなかった。むしろ、具体的は実践にあると考えた。そのため何か変わったゆきちをするキリスト教団体であるとの印象を持って、耳を閉ざした人々が多かったが、必ずしも正しく理解されとは限らない。

エミール・ブルニナーおるに、彼の生涯の仕事の意味を高く評価してくる神学者もいたが、珍しい時異なキリスト教の団体として多くの人の目と引いたが、正しく評価されたとは限らない。しかしヴォーリスは、生涯のこの精神もある勝利した神学者から、または自分の敵するある先輩から教えられて、それを自分の実践に生かすとか、ある特定の思想に導かれて、それを具体化するというようなことではなかった。神がこの自分に示し給うた独自の途を一筋に歩み続け、実践に生かすのであるというほどの強い確信に彼は一生を費やしていた。それはあたかも、信徒パウロがその主張する福音の解釈を次のような言葉で、「兄弟たちよ。あはたがたに、はっきり言っておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしはそれを人間が受け入れたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によるものである。」(ガラテヤ人への手紙 1章 11 ~ 12節)と主張したが、ヴォーリスもまた彼の一生の仕事となったこの団体の根本的精神を、主からの示しにあるものと確く信じて、この一事に自己の一生を賭けたのである。

この団体に好意を以って援助した教界の先輩たちは少なくなかった。例えば賀川豊彦のおこなった広い基督教界の勝利に指導者も大正はじめ頃からのヴォーリスの友人であり、種々近江を訪ねてこの社の運動に期待を以て援助をおしまなかった人のひとりであった。また、ヴォーリスの敵する神学者も少なくなかった。ヴォーリスの師と仰いだ教界の先輩、例えば、YMCAのジョー・アール・モットの如き勝利した指導者も、近江で始めた運動に助言と援助をおしまなかった。ヴォーリス自身もまた、それらの教界の先輩に学ぶところ、教えられる処は少なくなかったに違いない。

しかしながら、この団体の運動の根本精神に関しては、他の何人の神学や

思想に導かれたのではなく、ヴォーリスの独自の住居としての住の仕方も彼が人の住の頃、外国伝道への使命を受け卒業して九月に帰に到着し、聖書に導かれつつ、日に一節に主イエスキリストのみを仰いでほめるばかりで、次第に明確に自覚されてきたのである。

主人公の歩んできた生涯の性格と、また理想とし目的としてきたその計画に、大きな影響を与え、力を与えるのは、主人公の育った土地の精神風土であることが多い。ある種子がどのような土地にまかれたかにより、その種子の育ち方は、後々大きく違ってくるに違いない。そこで、次にヴォーリスの育った土地の精神的環境を見てみよう。

ヴォーリスの自伝によると、父方のヴォーリス家は1660年オランダからアメリカに移住したのであるが、名高い「ピリク"リム、ファーサーズ」がメイフラワー号に乗って移住したのが、1620年であるから、ヴォーリス一家が来たのは、その40年後であった。

ヴォーリス家の移住してきた頃の16世紀17世紀のヨーロッパは、宗教改革の影響が各地に圧倒的な力で拡がり、社会も文化も政治も、その域外に立つことの出来ないうような時代であった。この運動の担い手リーダーに、次ぐ勝れた指導者、フランス人の改革者カルベットの指導を受けてプロテスタントに改宗した人々は、いずれも、フランスやイギリス、オランダなどの最も進歩的な新興市民階級に属する人が多く、各地において、信仰の面のみならず、政治や経済や文化の部門に於ても保守的な勢力と戦って、その域外近代化の先駆となって、その土台を築いた人々であった。15世紀末、コロンブスによって発見された北アメリカ大陸にいち早く移住して建国の土台を築いたのもこの系の清教徒と言われるプロテスタント教徒であった。そして、ヴォーリス一家もその頃、このようなオランダ改革派のプロテスタントとして新大陸に移住したのである。

強力な生命力ある精神運動は新しい人間のタイプを作り上げるといふ。口

ーマ・カトリックの信仰に生きる人にある伝統的は人間のタイプがあるが
カルビニ派の新教徒にも強い著しいタイプがある。

メレリ、ヴォーリスの信仰と人間のタイプ、それは、彼一代に生まれたも
のではばり、300年、カルビニ派の信仰に生きた祖先の血が脈々と彼の
中にも流れているのである。

ヴォーリスと共に生活した内政政三氏は、ヴォーリスを、

『アメリカ人のうち最もアメリカ的人であったが、また、アメリカ人の
うちでも最もカルビニ派の伝統を身につけた人でもあった。』

と言っている。(8)

ヴォーリスを語るのに、彼の先祖から始めなければ ほぼ一半の理由は
ここにある。

カルビニ派の人間のタイプの特徴を幾つかを挙げてみれば、例えば、そ
の使命感の強さ、ルター派の人々が内面的神秘的であるのに対して、律法王
義的にも見えるほどに強い倫理的実践的な生活態度、職業や社会、又、政治
の分野にもその結果が実践として現れ出ているのは真実ではないとするよう
な態度なタイプ、ひとつの信仰の源泉から人間の文化と生活と世界の一切を
統一して考え、生きようとする姿勢、そしてそこから生まれる一種の合理精
神、メレリ、ヴォーリスが生涯、禁煙、禁煙を強く主張してやまなかったの
も、一面、祖先から受けついだ合理主義の現われではかろうかと思われるし、
聖日厳守の気風も長いこの派の信仰の伝統の中で、培われて、身体にまで肉
化されて、異教国の風習と一仕闘った人であったのせろう。

彼の祖先の信仰の伝統は、またヴォーリスの生き方の、バックボーンでもあ
り、彼の生涯の課題として、一生努力し続けた伝道団組織の根本の精神でも
あるのである。

また、16世紀の宗教改革はヨーロッパのキリスト教や社会に、根本的な
改革をもたらした。そしてその著しいことのひとつに聖俗の差別の徹底があ

る。聖職にある者も、俗界にある平信徒も、この信仰の根本から神の前にみ
は平等なのである。中世カトリック教会に於いては徹底した信仰は若を志
す人は修道院に入らねばならなかったが、宗教改革者等は、この点でも聖俗の
差別を否定した。牧師、伝道者のみならず、一般のキリスト者も皆神に召
されて、それぞれの職業に従事、その處で神に仕えるのであるという主張であ
る。

この点では、プロテスタントは可成りの歴史的功績をあげることにはできた
のであるが、「職業」のキリスト教化はほとんど言葉の主張にとどまり、近
代世界に於いて実績を挙げることが出来ず今日に至った。

アメリカの宣教師として日本に来た人は、明治以来未だある。その中で有
力な働きを日本の国に残した宣教師も少くない。しかし、一平信徒として
生涯を日本の伝道に身を捧げた人、近江ミ・シヨーンというがごとき、時異は
伝道団体を組織し、有力な団体に育て上げたような人は、他に類を見ないので
はあるまいか。ヴォーリスは平信徒の発想から、宗教改革者たちのこの「
職業使命感」とでもいう主張を徹底して生かすような団体、特に産業界にあ
りても住かそうと努力したのである。そのようば、プロテスタントの歴史の
中で、ヴォーリスの平信徒で産業界に生き足跡を残したその巧みは表出さ
れてゐるのであるまいか。

ヴォーリスの伝道の成否は、この団体の成長にかけられた。この団体にそ
の信仰と使命、その生命と思想のすべてを込め込んだのである。しかしな
がら、ヴォーリスがこの信仰と使命を徹底しようとするには、また、
その精神を高く掲げねばするほど、社会の風当りは強くなっていったの
は確かである。ヴォーリスは英語の教職の職を失い、建築師として間もせ
ず、近江伝道のために、ひとつの団体を組織し、それを「近江ミ・シヨーン」
と名づけたが、昭和9年2月、長い間用いて来た「近江ミ・シヨーン」の名を
「近江兄弟社」(Omi-Brotherhood)と変えた。なぜなら、見通しの

早かに吉田悦蔵は、日本の右傾化に近づきつつある戦争の危機を予感して、これに対処出来るような団体名が此後必要であり、それに、キリスト教の土着化が課題であるような時代に“近江ミッドランド”という名は外国風の名称は不適当であると思われただからであった。しかし、団体の創立精神、その主張や性格にいささかの変化があったわけではなく、今はその名が不適当という理由だけの改名で、団体の性格に性格があるような創立者のウォーリスは同意するはずはなかった。

このようなウォーリスに対しアメリカのコロラド州では、名誉地位を授けられ、国は彼を社会事業家として、その功績を認めて藍綬褒章を、建築家としては、その貢献多大として黄綬褒章を、最後に彼の昇天を機として正五位勲三等に叙せられ、瑞宝章が贈られた。近江川幡市では、彼がさだめた町に根をおとして事業を興したため、今日、市が発展したというところから近江川幡市名誉市民称号として、美しい宝石をもって飾られた紫紺の打ち紐が贈られたのであった。

そして、ウォーリスは昭和39年5月7日、83年と6ヵ月の地上生活を終え、近江川幡に大いなる足跡を残し昇天した。

第2章 ヴォーリス建築事務所

『奉仕としての建築』

ヴォーリスは少年の頃から建築家を目指し大学にもこの志望を抱いて入学するのであるが、2年後、外国伝道への任命を受け、その志望を捨て大学での籍も文科に移し、卒業して、数ヵ月後に、1幡商業の英語教師として赴任したので、建築家としての専門の教育を受けなかったが、年来の志望を捨てる後も好きは着くもあり暇な時には、自分の趣味として、建築の図面など引くのを楽しんでいていたが、明治40年3月きりで英語教師の職を失った後、近江川幡に留まって再出発の準備を祈り考えつつ、しばらく使った仕事のほり時を過ごしている間に、年来の趣味を注ぎしYMCA関係の建築相談に乗ったり、また依頼を受けたりしていた。そして、京都YMCA会館の仕事をつまみかけに、吉田 虎蔵、村田 幸一郎、そしてデュービニと建築事務所を開設し、戦前30年間に2千五、六軒の設計をこなしたのである。

ヴォーリスが教師を解職される時、抗議文が日本の2つの新聞に掲載された。ひとつは全国的な新聞であり、他は滋賀県の地方の日刊新聞であった。いずれもヴォーリスの解職を報じ、手厳しい抗議の社説であった。しかしこれはヴォーリスには慰めであった。なぜならキリスト教を無料で宣伝してもらったからだ。それにまた次の週から各地の英語の先生や宣教師やその他の知り合いの方から、しきりに同情の手紙が来られ、そのうちには為替を納入してあるのもあった。さらに幸いなことには、後々建築の仕事の要望が、このことにより漸々くるようになっていったのである。

このように第二章であるヴォーリスの歩みを見とくると、ひとつの大きな流れを見ることが出来る。なぜならば、教師の時代がなければ、吉田、村田のような生涯の協力者も得られなかったし、また教師の解職の事件がなければ、人々にヴォーリスの存在すら知られず近江の工に化していったろう。また病氣療養のためアメリカに帰国しなかったならば、A・A・ハイドにも出合わ

なかったであろう。A・A・(インド)に出会はないということも、メソレータムが日本に存在しないということでもあるのである。川は細いひとつの川の木の流れは谷間を抜け、固い大地までもぐり、また山は木の根を流れる間に、いつしか大毎の流れをもぐり大さなゆるやかに流れる大川となる。川の表面はゆるやかに流れているように見えるが、川底は大きな石をも、はごばにし、勢いよく流れている。ヴォーリスもこの川は川のせせらぎは、時を流るにすぎない。近江兄弟社という大川になつていくのである。

ひとつの川は木の流れである。ヴォーリス建築事務所は決して、大きな川としての「近江兄弟社」を離れてひとつ流れてしまうことはなかった。その「建築設計」という川の流れは「ヴォーリス」という川の流れとも同じである。また、「キリストの伝道」という川の流れとも一致していた。それぞれの流れは離れることはなく、同じ速度で同じ所を目指して流れ進んでいたのである。

このひとつの流れである「建築事務所」の働は、近江ミッシェンの台所を助ける産業部門であるばかりではなく、ヴォーリスにとりては最初からこの仕事は神と隣人に仕える奉仕の重要な一部門であった。建築事務所からの収入が近江ミッシェンにとっての唯一の資金源であったのであるから、ヴォーリスも勿論この仕事からの合理的な報酬を期待していたろうが、利益が第一の目的では決してなかった。ヴォーリスにとりてこの現実の職場が神に仕え、隣人に仕える奉仕する第一の現場であった。ヴォーリスが日本に来たこの最初の仕事、教師としての勤めにも信仰と祈りをこめて全身の努力を傾けた。またこの産業も近江ミッシェンの他の奉仕部門、病院、教育などの奉仕部門と、同列の重要な一部であり、部門はみな神に召され、身を捧げ、神の栄えのために働く奉仕の現場なのである。ヴォーリスの事務所は他の建築事務所と異なつて、あくまでも構成員がクリスチャンであり、多くの人々が設計の仕事と伝道の仕事の両方にたずさめ、働いていたのである。事務所開設の当初から、朝

仕事を始める前に讃美歌を歌い聖書を読み祈りを捧げ、所員一同で守る短い祈拝はそれ以来守られてきた大切な行事であった。そしてまた、夕方4時半になると事務所の仕事を終え、それから方々へ別れて伝道に出かけていくのが日課であった。

ヴォーリスはそうのように理想をかがけて設計活動をするのである。建築事務所は建物を建てる人の依頼に応じ建築の図面通りに建築が出来上がるように土建業者と素人の依頼者に代わり交渉、その建築の予算から万事万端、相談に乗ってその完成まで面倒を見るのが仕事である。しかし、当時は相手の土建業界というのは、所謂、近代化の最もおくれに居る業界で、その下で働いている労働者も近代以前の古いしきたりに住める人々が多かった。それに、独立の建築事務所などはヴォーリスが事務所を開いた明治40年代には、大都会の東京にさえ数えるほどしかなかった新しい職業であった。相手の土建屋もその下で働く大工や土木職工、人夫など、みは新建築で非合理的な古いしきたりにとりまかれています。そのような業界の人々を相手に、ヴォーリスはそうのように信仰をもって理想をかがけ奉仕の精神をこの現実の場に生かすには、どの面でも啓蒙ではなかった。

建築について全くの素人の依頼者の理求に答へ、業者にごまかされぬように工事が完成して依頼者に引き渡すまで、建築工事に対して万事万端相談にしかも親切に、工事完成後も建物の内装装置家具に至るまで世話をしほければならぬことも多かったし、また一方、古いしきたりに住める、この業界で働く人々の労働条件や生活を少しでも改善して合理化しようと、この方面でも、ヴォーリスは懸命の努力を払った。

また、建築の仕事にキリストの精神を生かすためにヴォーリスが如何に真剣に努力したかを示すひとつに、古いしきたりの多い土建業界に「日曜休日」の制度を生かそうとの強い彼の主張があった。ヴォーリス建築事務所が工事を引受ける業者と交わす契約には、必ず日曜日には工事を休むという一項

目があった。彼は労働者にとっても六日働いて一日の休みを執ることが、心身のために最も合理的で健康な生活であるとの強い信念を一生持ち続け、これにこの聖日厳守は子供の間からの宗教信念を支えられて、生涯変えられなかった。現在の日本では、古くからの欧米の日曜休日の制度はどの業界にも定着してきて主張せねばならぬものは事ではないが、ヴォーリスが事務所を開設した明治40年代に、しかも古いしきたりの時に多い建築業界にこの制度を主張して貫くには、命程の勇気と信念がなければ、やれることではなかったろう。ヴォーリスは多国人としては、むしろ山柄で多少神経質的な行儀のよいアメリカ紳士であったが、古田悦蔵が言うように、その心の底には奥に救いのあるものを一生持ちつづけて生きた人であった。彼は生涯この主張を変えなかった。

また、ヴォーリスの生涯の協力者であり、また建築の仕事の片腕でもあった、村田幸一郎も業者とヴォーリスの救いこの主張の間に立って、幾々困惑したことがあったようである。このような信念を生かそうとして、ヴォーリス建築事務所はいろいろな困難にも出会い、またその為には不利なことをすることも少なくなかったし、そのことへの賛否是非の意見も多くあった。しかし、このことはヴォーリスがその職業を利益のためと考えず、その信仰を現実の職場に生かそうと如何に真摯であったかを示す事実であることに間違いはない。

ヴォーリスにとって福音に生き、主に従うことは命かけであり、他の何よりもまず大切にしなければならぬ事であった。

『まず 神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのことは、すべて 添えて与えらるゝであらう。』(マタイによる福音書 6章 23節)
これがヴォーリスの信仰であった。

それだから、ヴォーリス建築事務所にかき及ぶ、近江ミナトの歴史は、社会とこの団体との“提携の歴史、また“専断の歴史”であったといつてよ

り、また、ヴォーリス自身とこの団体との「提携の歴史」、「廃業の歴史」とも言い得る。

それを教えるようなエピソードがある。

京都四條の鴨川端にある東華菜館は中華料理館がある。京阪四條駅からよく見える建物であるが、これはヴォーリスの数少ない商店建築のひとつである。もともと「矢尾政」というレストランであったことがあり、この設計を引き受けるに当たって、ヴォーリスは「酒」を一切施さなければことを条件とし「矢尾政」の方もそれを承諾して依頼したのである。酒抜きのレストランの営業は大変であったろう。それがあじあめか今では「東華菜館」の手に渡ってしまった。酒抜きというのはヴォーリスの宗教的拘限で、クリスチャンである事務所員たちも守っていた。また理由のなかり贈物は一切受け取ることはならず、ある時ヴォーリスを慕ってわざわざ鹿児島県の工業学校で教師を辞めて入社した人が、ついに、かり業者から時計をもらっていたのが発覚して、事務所を出はければならなくなった。無論、その人のその後の消息は知られていない。

東華菜館

(元矢尾政)



昭和元年竣工

ヴォーリスの進歩的な主張と誠実で親切な人柄を信頼して建築設計を依頼に来る人々も次第に増え、業者の中にも彼の志に敬意を払い、その志をバックアップする業者も出て来るようになった。例えば竹中工務店の初代社長で創始者の藤石衛門氏のごときも、そのひとりでヴォーリス建築事務所と共に次第に業務を拡めて、遂に今日の大企業に成長した業者のひとつであった。

このように、ヴォーリスは「建設業界」という人々帯にフロンティア精神をもった、にじみ槽の山舟をこぎ出す。しかし、次第に山舟にちが集まり、麻も組むようになってくるのである。このフロンティア精神、ヴォーリスに備わっている精神がもしあれば、なぜなら、建国時のアメリカは東部の新英州を中心に13州の山はな連合国家であったが、以来、西部へと無限に広い大陸を開拓者達がフロンティアを拓けていく。19世紀末には太平洋岸も開拓していき、にじみ槽のアメリカのフロンティア精神もゆき場を失ったような時に、多数のアメリカ人が当時の盛んな信託の救済のため、暫く伝言という名にちが、太平洋を越えフロンティアを拓けていくのであるが、その中にヴォーリスが数えられるからである。この人達はいつでも、アメリカで最も開拓者精神に富んだ精神的な人々で、しかも有能な人々が多かった。

ヴォーリスの進歩的な主張を理解し協力してくれた人も多くいたが、反面、この主張に反対する動きも当然のようにあったに違いない。このように強い信念を持って働いていたヴォーリスにとって、悲しい事件が起こるのであるが、その事件の事が『失敗者の自叙伝』に載っている。

『大正7年(1918)のできごとをしようとしたとき、私はその年、最も悲しい事件を述べなければならぬ。それは、私の全生涯を通じて、最大のショックであり、私たちが経験した一つの大失敗であった。それは私たちの事業の拡張期の有様において、各地からいろいろな人が参加し、人員が急激に増えるにつれ、中には以前の習慣におぼれる者もあらわれる。ついに5名の者が、ひそかに酒や煙草主のめだし、12名の者が遊廓に出入

するようになった。はじめのころは、だれも知らなかった。しかし、彼らの挙動を目撃した町の人々が、私たちの主義をいつから捨てたのかと聞く人があって、はじめて彼らの不行跡が分って驚いた。

こうした悪事があったので、私たちは社会に対しても面目はいいことになった。実行委員会では、祈りつつ善後策をはかった。結局、これは葬儀責任であって、たとえ、事件に関係がないうちも、後輩を正しく指導をせず、私たちの主義主義の生きた手本となることができなかった責任は、免れえないということになった。

そこで、この勝ったん会社員が一齐に総辞職をして、団体も3日間はお悔いをする事になった。その後、再歎身の約束を立て改めて団体に復帰を望む者は、定められた期限までに署名をすることになった。この署名に立ち合ふように指名され、この葬儀に押えていたが、再入社を志して署名にくるものが、果してどのくらいあるだろうかと多少心配していた。しかし、はじめのころはホリホリであったが、やがて葬儀をなして署名にきた。その日の終わりに、事件を起こした5名以外の者は、全部署名を落した。それで兄弟社はそのときとたび死んで新しい米菰と熱情とをもった。再びおみがえったのである。ただ去った5名に対する悲しみは深かった。かつて舊侶であった1人は、わなの手紙を残して去った。彼は、その中で自分は意志が弱かったため、私たちの基準を守ることができなかったが、今後10年必ずから修復して、また帰ってくることを述べた。別の1人は、もう一度試用してもらいたいと言って帰ってきたが、2度目の失敗をして去って行った。彼はしばらくおそご働いていたが、ついに悲しい書信を残して自殺した。こんなことがあって、新しく署名した人々は、新しい決意で再興につとめ、団体は更庄し発展して行った。しかし、私たちの傷はいやされなかった。四

ここに、一般社会に見ることのまれな特異な"総辞職"と、他の集団には考

えられなければならぬ。宗教的基盤を持つ建築設計事務所のあり方を見る。

ヴォーリスのキリスト教を基盤とした信念は、部員の「給料配分」の中にも見ることができる。建築所員の中においては、おほむねに給料が分けられ、たてうである。早くから建築所に入った人も、下の方で居続けている人も、皆同様の給料配分であった。また、その人の家族構成人数によって給料が増加される方法であった。たてうである。抑鬱のみにとらわれず、主の栄光のみを、働こうとする姿勢がここに見られる。そこには彼らでしかわからない喜びがあったのだと思う。だから、彼らはあんなに多くの働きを成すことができたのだと思う。しかしながら、ひとたびその信仰の姿勢がくずされると、これだけ不合理な、窮屈な集団はないのかもしれない。

とにかく、このようにヴォーリスにとって建築設計は、神と隣人に仕える奉仕の場であり、建築事務所のみを取り出して語ることはむづかしい。

『組織者・ヴォーリス』

ヴォーリスが法道と兼業とはいいながらも建築家としての職業の確立を目指して奮闘したことも、多くの人々の奮闘草となっている。

ヴォーリスの建築目的とする意図は次のような言葉によって、いい表わされている。

『……建築依頼者が寝かせるのは住宅の中であって住宅を飾る織物や彫刻で肉體を凌ぐことはできない。住宅に居る人々の健康と活動の健康こそは、一番大切なものにして、その人の住宅の外面が隣人に如何に映じなうと、設計者の個人的名譽がその腕によりて如何に左右されること、それは未だ未だである。』 (9)

これ故にヴォーリス等の設計方針はやはりクライアントのための奉仕ということが第一義的にば、こころなのである。

『吾々が過去30年間終始一貫守り来。にことは、その建築の目的が如何なるものであるうとも至極簡単な普通の住宅をはじめ、条件の多い建物に至るまで、最少限度の経費を以て、最高の満足を与える建物を人々に提供せんと、一途に努力して来た。』 (10)

このあたりにはヴォーリスが“OSC”の建築金物製造を始めるに至る動機がうかがえる。戦前におけるOSCの製品はシェラーゲやエールに匹敵する品質を誇りオール国産品を自標とした国会議事室などにも数多く採用されているのである。もちろん、ヴォーリス事務所は、金物のようなものとも破損し易い所にこそ、もっとも注意が払われていることはいうまでもない。

また、設計料についてはいかなるものでも6%を要求したといわれている。さらに施工業者との慣れ合い費について非常にきびしく、監理者の重要性を力説したともいわれている。

また、ヴォーリス建築事務所の注目すべき点は、設計事務所における専門別の分業を早くから提唱し実行していたことである。最近の事務所はだいた

いこの傾向も、こころが、ヴォーリスは早くから実施したとせば、横浜におりには岡田豊仲とか助川が長く続き、後に「丁」でカリフォルニア大学を卒業した山川泰三を加えて、当時としては異色のある設計体制とし、こころにある。つづきで「グ」も早くから外人技師を雇って担当させ、衛生や空気調整の問題についても非常に重視した設計を行ったことは注目される。

また、ヴォーリスの仕事の仕方には役割分担が明確なほど細分化されており、今の言で「ライ」と「スタッフ」の違いははっきりしていたところである。私達は民主主義と言えは何かしら何まで平等という錯覚を起さしがらであるがここに西洋的合理主義精神を見る。しかし、前に述べたように、給料の分配は公平である。

『建築は、芸術と科学の融合よりなるものである。それ故、而體、計画、衛生、空気調整等々建築上の設計や工學上の相談の一切を、一人の技師より期待せんとするは現代の如きが業化したる時代に於ては、不合理のことである。唯一の解決策はいつも統制のとれた団体で、必要な専門家は各自の専門の技師を担当し、また専門家同士の相互扶助をなす建築事務所を設けるより外はないと信ず。』(11)

これは現在では当然のことである。しかし、ヴォーリスは大正時代(1910年代)からすでにこの方法を採りてきたのである。

如何にヴォーリスが組織者として非凡な才能を持っていたかがうかがえる。ヴォーリス建築事務所の作品の数は戦前だけでも数千に及ぶ数であることは、前に述べた。その作品の中には時代の都市景観の重要な要素となったり、その地域の人々に親く愛されているものも少なくない。しかし、それらが多くの人々にとってヴォーリス事務所の設計によるものであることは、ほとんど知られてはいないのである。

京都へ行ったことのある人は必ずしも血糸の大衆百貨店を知らない人はおそろしく多いだろう。そして京都やその近郊に住んでいる人々は、血糸大橋の側に

ある「アムラー・タイプ」は中華料理店「東華菜館」(前述)とははじみ別りである。吊橋といえは古い橋でありながら、(1)くつかの奇蹟があることに気がついている人は少ない。たとえは御用金川にあるイギリスの「デュードル・ゴシック」風の「下町邸」はじは、わが国でも珍しい豪壮な出でである。あるいは京都の北の方、同志社大学の境内にはミ・ミ・ニ・ス・ク・ールだけに多くの洋風建築がある。その中でつとまれ自立し建物を「アーモスト記念館」がある。この大学で学んだ人々には思い出せる建物であろう。

大阪の御堂筋の東側に利野藤吾設計の十合百貨店と並んで、堂々たる「大丸百貨店」がある。十合百貨店のミターコは外観に比べて、落しつきのあるデザインでそれぞれに細部の装飾的は手芸には、華麗な意匠が見受けられる印象的建物である。また同じ御堂筋の上江崎近くには珍しい「行方」の、夕陽りり大岡生命の建物がある。同じ上江崎の近くに煉瓦貼りの「日本基督教団大阪教会」が重厚な格で建を立っている。

東京のお茶の水の駅近くに「文化アパート」があった。戦後占領軍に接収されといはが、戦前のインテリの間では非常に有名なもので、九段の野々宮アパートが完成する前はほとんど唯一といつてよい洋風のアパートであり、外務から帰国した芸術家や文化人たちが好んで住んでいたものである。お茶の水駅を角へ駿河台へ坂道を下ると左手に「主婦の友社」がある。この建物は主婦の友といふ雑誌の驚くべき発行部数からいっても、もっとも多くの人々——とくに全国の家庭婦人に広く知られた建物である。虎の門の交差点にある「不二屋ビル」も、その中に「チャーマン・ペーカリー」があり豊ヶ園の宮内街に近いので、多くの人々にはじみ別り建物である。鳥居坂の岩崎坪跡に建てられた国際文化会館へ三河台町から行く途中の左手にある「東京英和女学院」は、傍を走る人々にいつも一種独特の洋風の雰囲気を与えている。

西宮市の山手にある関西学院と神戸女学院は専らそのものが全国的に有名であるが、そのキャンパスの美しいことは日本の学校の中にも屈指のもので

ある。学校といえは、他に5校の遺構なる高校、弘前の「東洋美術」山梨の「英和学院」、大蔵の「ルーシヤ学院」、神戸の「御堂大学」、長崎の「聖メロ学院」と、眞面目学院。熊本の「大輔学院」と、札幌学院。おどには、それぞれの人々にとって親しまれたい建築の建物が建てられている。そして、日本を越えて市販には果敢と専門学校がある。

東京、横浜、大阪、神戸の建物は多くの人々が現在もなお大いに利用している施設である。

札幌、松本、新潟、金沢などの地方都市の中心部にある大規模な各支店の建物は、それぞれの市街地と市街地を形成するのに大いに役割りを果たした。

そして全国各地にある数多くのプロテスタント系各教会の教会堂と表りなものは、これらには、すべてヴォーリス建築事務所、第二次大戦前の作品である。作品の数からいって戦前にこれだけの数だけ設計をした建築設計事務所があったのだろうか。ともかく、非常に多いことだけは確かである。いづれも日本の都市社会の中で重要な役割を果たしたことは確かである。

それにもかかわらず、大阪と京都の主要百貨店を論じては、観光バスのガイドの説明に出てくるような有名な建物は少ないといえる。

一般に建築設計組織による作品は、その主宰者や幹部の人々にかんによる場合が典型的である。とくに建築事務所という形をとる場合には、その所長次第による、大きく左右されるのである。

ヴォーリス建築事務所についても例外ではない。というのは、ヴォーリス自身の方針、建築理念がその事務所のすべての作品に表れているからである。そのひとつとして、ヴォーリスが正統の教育を受けた建築家であるため、その作品には素人的甘面が現れており、決して独創的作品とはいえず、かえって模倣的といつたほうがよい作品が多い。かつてヴォーリス

ス事務所で薫陶を受けて設計に従事した人々の甲にも、このまちはヴォーリスの建築家としての限界と肯定する向きがはたはたあった。

初めのヴォーリス建築事務所はヴォーリスとその兩人若輩は、大部の建築の素人であり、彼等は最初建築への知識も技術も持ち合わせてはいなかった。従ってこの知識はマッソー (Mussaw) というアメリカの建築大鑑と存石、磁石と独学による。これによると、最初の三人、本曲筆、即ち吉田悦蔵、元五郎、佐藤久勝、全としてこの幅の出発者であり誰一人専門家といえる人はいなかったものである。しかし、彼等は独学で得た知識と技術も駆使して十分に専門家に新築し得る図面を書きとけるものがあり、詳細はとも相成に画いてはいるがその奥力は専門家と似て変わる所はなかつたものである。それだけ初期の苦勞は並大抵のものではなかったものである。また様式建築の最晩年に当てる大正末期から昭和初期にかけて、彼等の設計活動の最盛期である。このがある意味では幸福であった。なぜなら前進したことに、ヴォーリスの意匠決定に当たってはアメリカから送られて来る建築雑誌のコピーにする。たことが多く、従って彼等の創る建物は様式的に一貫性に見え、混在した一見難然とした表情のものが多いためである。

ヴォーリス建築事務所のこの特徴は次の引用文の中からもわかる。

『当事務所の建築設計の多くは組合的である。時々の型に因るる畢を盡け、各種異形の時徴を統一したものである。すなわち古典型を模倣し、これに近代的改善を施せるものである。』

建築界に於ても応用型には、ある種の積極的便宜がある。』(12)

“古典型を模倣し” ということばヴォーリスを獨創性のない建築家と見せた原因でもあり、また戦前二十件近い建築を作ったといはから、建築界の内部に評価が低かった原因でもある。しかし、このふうな“古典型を模倣し”はヴォーリス建築事務所だけではなく、その当時、多くの所で見られるものである。この様子を、相模真次郎の著した『明治の建築』に見てみよう。

「イギリスで発祥しアメリカで独自の発展を遂げたビュチャレベクの木造建築の影響は、明治10年代から元海軍の随員使の建築や、横井や神谷の外人住宅、ミッシェン系の学校建築に表れ出していたが、明治20年から起にその数を増し、工部大学校出身の若手洋人建築家も含めて、建築界の焦点のひとつとなった。

だいたいビュチャレベクの住宅は、欧米においても「パターン・ブック」つまり住宅図集といった一般向きの住宅指南書によって普及していたのである。すなわち、まず気に入った形式の建築を本から選んで、一部を修正したり、他の部分と組み合わせたりした平面や外観を求め、それから細部に手を入れている。細部に厳格な規則のほかに、この種のデザインは自由度をさらに高めるし、それがこの時期の建築家にとって、創意や芸術性を発揮する場所であった。

「古典派の応用」であるヴォーリズ建築事務所の作品のデザインが、もとるに足らなりのかたけ二点に関しては、やや慎重にならざるを得ない。なぜならばミッシェン関係の建築は別としても、なぜあそこまで多くの日本人の施主によって設計依頼を受けたかということである。大東社長の下村氏が幸館建築の本格的なものには、やはり外国人の建築家ではなくてはできないといふこと、わざわざ江（鴨）の町へやうと来て設計を依頼したというエピソードが伝えられているが、これによって分かるように、「コニドル」七喜後の洋風建築のチャンピオンとしてのヴォーリズの役割は西洋化即近代化である日本の社会において、やはり重要なものだったためである。

ヴォーリズの多くの作品の中でもとくに、市街地に建てられたものよりも、住宅地や田舎に建てられた牧歌的な雰囲気をもった赤煉瓦にクリーム色の壁といった幸館は、ヴォーリズ独時のものであった。本格的なリーフ・ティンバーとスタッコの幸館住宅はヴォーリズにならざるを得ないといふことも多いだろう。多くの日本人のイメージの中にある幸館の原型はヴォーリズにある。

て考えつけられたといふことも多い。天然スレート葺きが千鳥模様だし、びり、
くの洋館、その屋根の上が両見廻、確、四時計、庭の噴水は、こけし、
建築史にはとくに価値高いものではないとしても、住宅藝術の上ではやはり
重要な位置を占めるだろう。

また、ヴォーリス建築事務所の作品の中で、もっとも注目しなければなら
ないのは、デザイン的基本的要素のひとつである「ヒューマン・スケール」
の問題である。明治政府に雇われた外国人建築家やその弟子たちの帝國大
学工芸士たちの作品と比べると明らかにヴォーリスの方が空間構成において
ヒューマン・スケールを把握していたと認められる。たとえば、「東京大学」と
関西学院、や「神戸女学院」を比べて見ても、「東京大学」はヒューマン・ス
ケールを逸した形式の化喩であるのに比して「神戸女学院」にはアンティ
ムは空間が緊張を保ち、をつくり出されている。それは帝國大学とせよ、キ
ョンスクールという差異であるといえればそれまでもしれない。しかし、こ
の問題は単に建築だけでなく、ユニドルの「古河莊」とヴォーリスの「下村
莊」との差異とも関係する。

また、もっともこのヴォーリス建築事務所の作品の特徴として、「暖み」
を感じられるという点である。このことは越えていえば、素人はさかしくる「
暖み」なのかもしれない。大阪の「大丸百貨店」それに「下村莊」にしても
どこどこに泥臭い。どうもプロポーショナルが簡潔にしているようである。しか
し、研ぎされた鋭利さや優美さといったものは欠けているが、実に暖みのある
意匠である。あのオーギュスト・ペレーの弟子であったヴィヨニが小説『
粗い石』に書いた、あの修造士たちが苦勞してひとつの修造院をつくる様子を
思われる。技術よりも祈り、論理よりも想像力によって、まず「建築をつく
ることを始めた者たちの仕事をつきまとう建築の内面的充実が、そこに描か
れている。その内面的充実がヴォーリスの作品にみることのできる「暖み」と
一致しているのだろうか。

下村邸 (大丸ヴィラ)



1932年(昭7年)に
「中道軒」と名付けられ
て京都御所の近くに建つ。

敷地面積 3061 m²

建築面積 512 m²

地下1階・地上3階の鉄
筋コンクリート造である。
総工費17万5千円であ
った。ハーフティンバー
のチュードルゴシックで
作られている。今は大丸
ビルとして展示場など
に使われている。

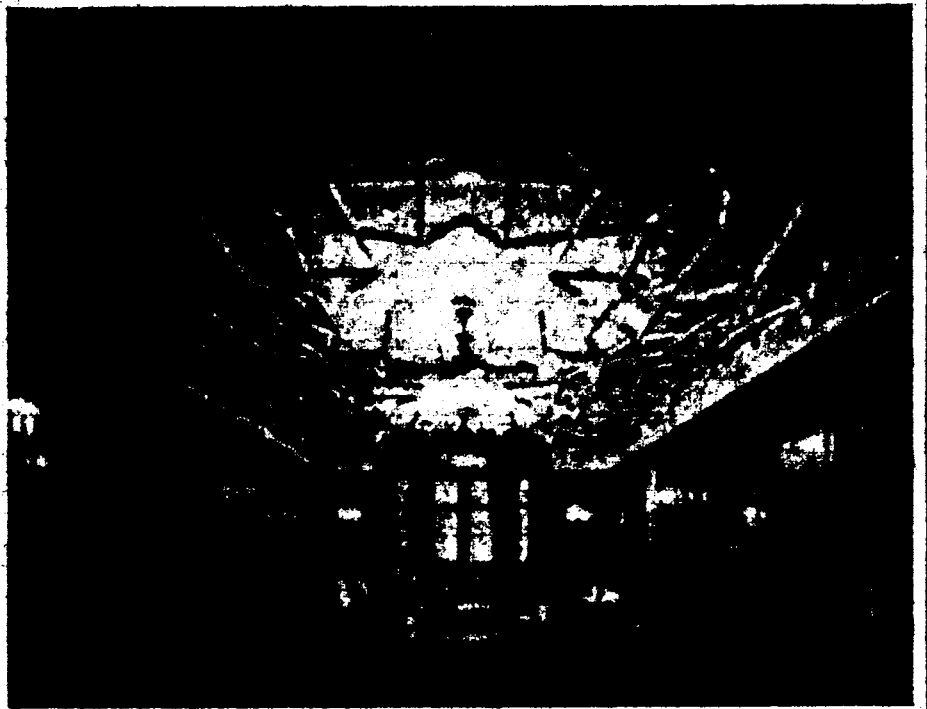
上> 正面玄関部をみる

下> 裏庭より西面の外観をみる



下村邸

2階に通じる階段の
手摺やパネルはすべ
て丹松の乗器製作所
で作った古樫の3セ
ンチ程の併母板で床
はアメリカからのビ
ンサムが使用されて
いる。また七彩の陽
光をとおす窓はステ
ンドグラス---などで



いずれも18世紀の様式とい
えよう。

戦後 アメリカの進駐軍司
令官の居住に転用されたが、
昭和28年返還された。そ
れ以降荒廃した部分は改修
された。



上>1階食堂より 中央部のテ
ラス全景をみる。

下>玄関ホールの吹き抜け部
分を見る。窓にはステンドグ
ラスがはめられている。

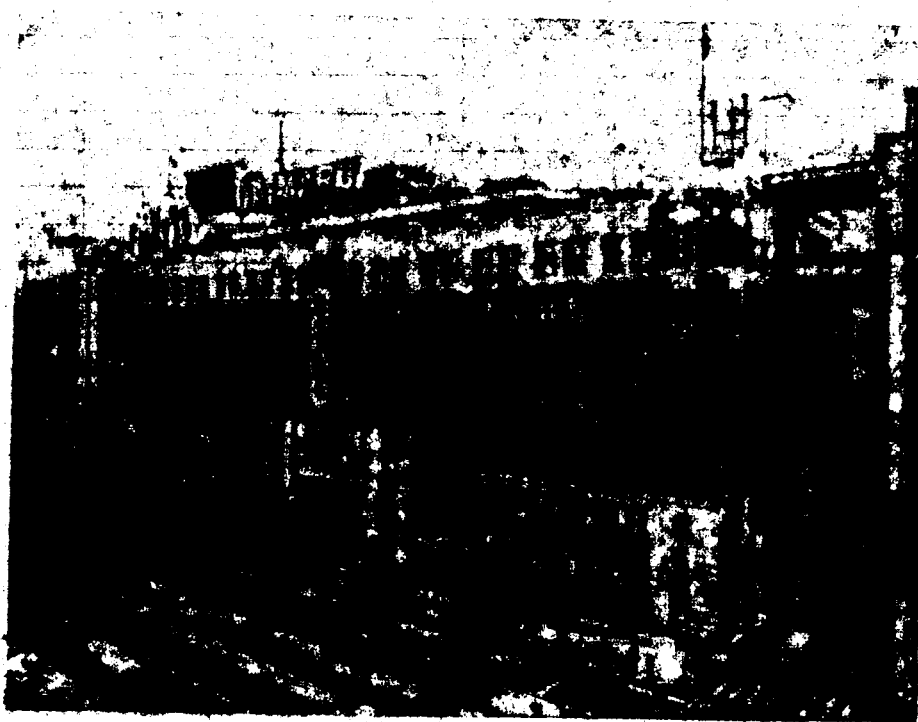
『大丸百貨店』

ここで少し、作品を通してヴォーリズの働きとその当時の施主のことを見と見たり。

まずヴォーリズの作品の中で代表的なものである「大丸百貨店」のことも取り上げて見よう。

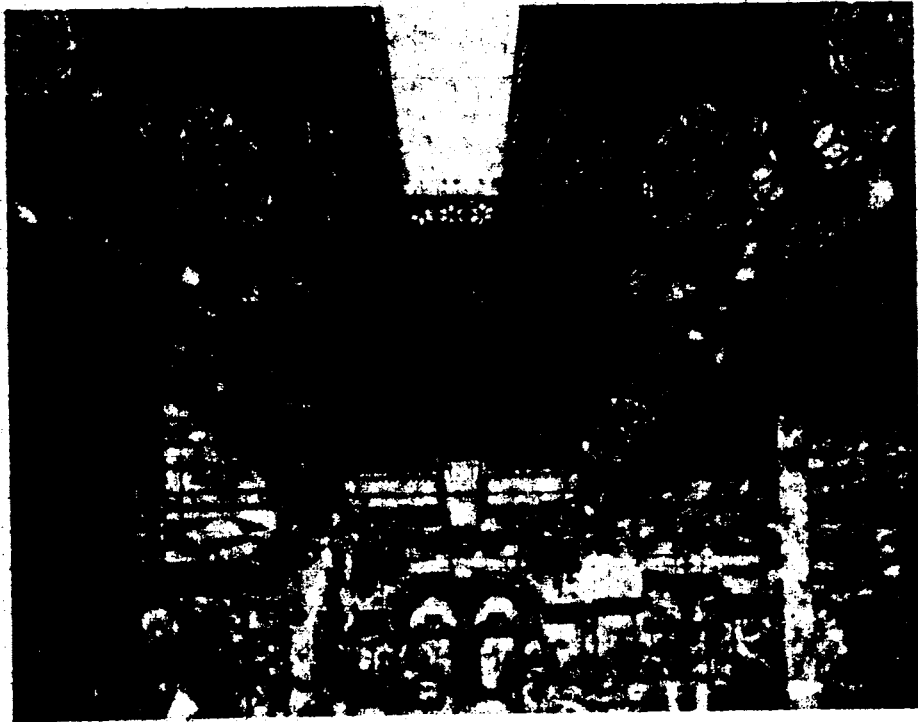
大丸百貨店は歴史が古く遠く江戸時代に既に現在の場所すなわち世帯橋筋に大丸呉服店として店をは、こおり、江戸や京都にも店があったといふから、東の越後屋（現在の三越）に匹敵する大店であった。ヴォーリズに設計を依頼した先代の下村正太郎は大変は血奔気まの人であったといふのである。

ヴォーリズが最初に設計した建物は敷地も現在の約4分の1であり、その当時御堂筋もできていなかったから、正面は世帯橋筋に面していたことになる。木造で地下1階、地上3階建て、ゴシック調であった。これは7年の竣工で、2年後の大正9年の火災で焼失してしまふ。こいる。引き続きコンクリートで設計され、4期に分けて作りだ完成したのは昭和8年5月8日である。



大丸百貨店が設計されたのは大正7年、しかし大正9年に焼失。大正10年に再建され、才4期に分けられ工事され、昭和9年に今のようは型に完成する。

大丸百貨店（大阪本店）



大丸百貨店 (大阪本店室内)

大阪本店1階の売場の天井は創建当時のままで、過剰と思われるほどの装飾がほどこされている。一説によると、ライトの帝国ホテルを意識して設計されたということである。

一期は心斎橋に面した南側、次いで同じく北側、更には御堂筋側と大きくはなれてゆく。設計も始めから生体計画がなされており非常に計画的に増築が行われた。初めは「ボニタ」と言うアメリカの建築家がホーリーズにあつて招かれて担当し御堂筋側には、これから佐藤文勝が引き続いて担当した。最初のはレネサンス風で、後の方はゴシック調である。だから、御堂筋に面した方と心斎橋に面した方とでは様式が違ふことにはなる。このふたつ所にも、「ホーリーズ」の様式に対する姿勢「古典型の模倣し……」が見られる。

この大丸大阪店は時に純爛たる装飾が施された内部に時色があり、甲と階にはギャラリーが廻され、これは現在でもそのまゝになつており他の百貨店では見られない風情を見せている。最初この甲と階とはオーケストラの演奏が行われたと言う。百貨店が現在のうちに工足で自由に出入り出来るものになつたのはそれ程昔のことではなかつた。この建物が作られる時には室内には厚いじゅうたんが敷き詰められ、客は靴の上に上袋をかぶせられて店内に入らなければならぬが、毛ぞうがあり、従つて内部の過剰とも言える装飾

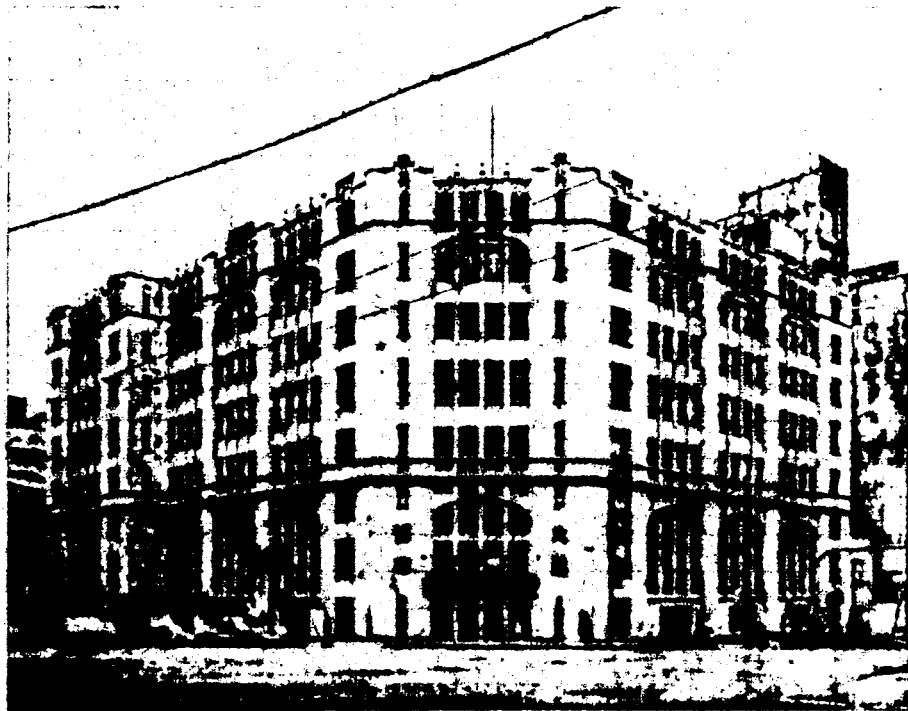
はむしろ、現在の市街地のロビーを設計するつもりと考えられたのかもしれない。この
おかげで、しかも店の真中の母がはら階までの巨大な吹き抜けがあり、にぎやか
な天竺が入りこんで来る仕掛けには、この、磨かれた大正、しかも新進による
構成である。

この大丸大坂店や京都店が作られ始める大正中期より以前、即ち明治末期
から大正の始めにかけての大丸百貨店は大変な経営危機に直面していたらしく、
何回とはく倒産寸前の憂き目に合い、はがし一歩手前で引き返すという状態が
続いていたらしい。大丸百貨店は老舗であったこともあって大正前期の危機
の折には時の実力者大隈重信のバックアップや関西新聞界の協力などもあって
辛抱と保ち続けたと言う。今から見れば危ぶまれはれどことであるが、現実であ
ったことは『大丸三百五拾年史』に詳述されている。この当時の社長がウー
リス設計の“下村邸”の主人、先代下村正太郎である。彼は早稲田大学を
出たヨーロッパ留学した西洋仕立みのインテリであるが、老舗の正統とし
て品があり性格的にも他人に好かれる人だったらしく、社長になると何回か
の危機に瀕しはから立ち直れたのも、この人の人格にあるところが大きいと
言われている。

かくして奔行帰りのインテリ社長に見込まれた“ウーリス”は大坂店、京
都店、更には下村邸等一連の大丸百貨店系の建築物の設計を依頼されたのである。

大阪大丸百貨店と並んで、大阪市西区江戸堀1丁目の肥後橋には、“大同庄
めじろ”がある。当時の大阪では最大の規模を誇るビルだと言われている。

竣工してから60年近い歳月を経ても今はお外部は当時の姿を止め、残っている
のはオフィースビルとしてはむしろ稀なことである。この建物は8階建てで
あるが、設計当初は10階建てを計画されていたが、大阪市の許可が得られず
結局今のまゝに納めてしまったとのことであるが、要するに高さ10丈（三



大同生命ビルの絢
爛華麗な外観を少
々装飾過多の感は
まぬがれない。大
正最大の規模のビ
ルであった。なお
外装はアメリカか
ら直接買入れた
テラコッタ貼り。

大同生命ビル (現・大同生命肥後橋ビル)

1m)以下という当時の規制に抵触するといふことであつたのである。更
には2階までコンクリートが打ち上つたところでも関東大震災があつて一時工
事を中断し、相当の補強設計の後工事が再開されたといふのである。

大同生命は江戸時代の大坂の豪商加島屋の広田一門を継承する会社で、ウ
ォーリスが設計依頼された時の社長は広田恵三といふ。ウォーリスの妻、
菫喜子の実兄であつた。

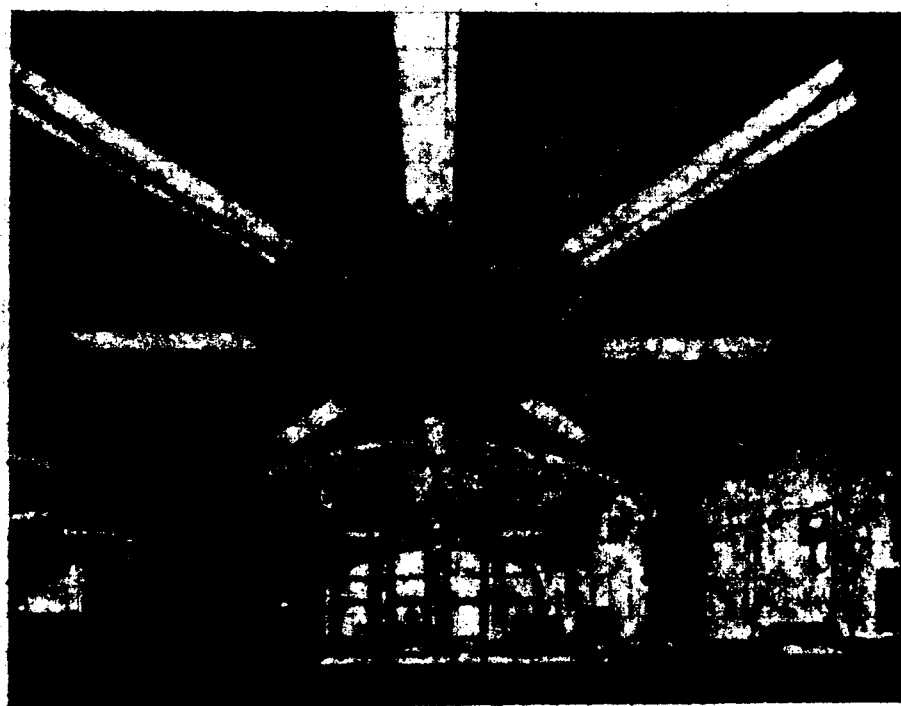
ウォーリスの代表的な仕事と見てみると、大抵百貨店とか大尾政(現在の
東華菜館)等主幹は商業ビルはほとんどなく、大抵は倉庫や学校、教会衛
生に限りおこつてゐるから、大同生命とか主婦の友社といふに業種としては甚少は
い。この甚少ない仕事の中で大同生命に限って、東京や横浜、札幌といふ大
支社ビルを設計してゐるところを見ると、単に妻、菫喜子の兄の会社という
だけの連なりではなく、もっと構造的な共通が広田恵三社長といふ點にあるに
違ふ。

広田恵三は生命保険会社の経理員として単に利益のみを追求すること

非し和航の大株主は九命者に選たすべきであるという意思のもとに、株全体
の50%以上を和航一門に集中させ、利益一掃張りの株主の出現を拒み続け
たと言う。要するに生命保健会社の社会的意義を理解できず株主は困ると
いうことであり、特にこれ以外に真にこれを理解できる者はいかに少いば
いという自負もあったのだと思う。

因みに昭和の初めの世界大恐慌の大波をかぶった和航の和島銀行の倒産
するのがあるが、この時も頭取であった和島連三は資金者や和航一門以外の
役員、株主には一文の負担をかけるはなからと断っており、当時、新米とばかりし
て美談とされている。

大同生命二十五年史の中に和島連三の9つの支店ごとの写真が掲載されてい
るが、和島支店を前にて他は幸面建築であり、そのほとんどがルネッサンス様
式で出来ている。もっとも生命保健会社は西欧から移入されたのだから、建
物も洒落た意匠が施された建物の対象として町の人々に佩服づけられる必要が
あったのであろう。ヴァーリズを設計者として選んだ大きな理由に、生命



同ビル1階。ここ
は2階までの収収
け空間の営業室で
あった。現在は2
階を作り、その
2階空の天井とな
っている。きれい
な意匠が室内には
ほどこされている。

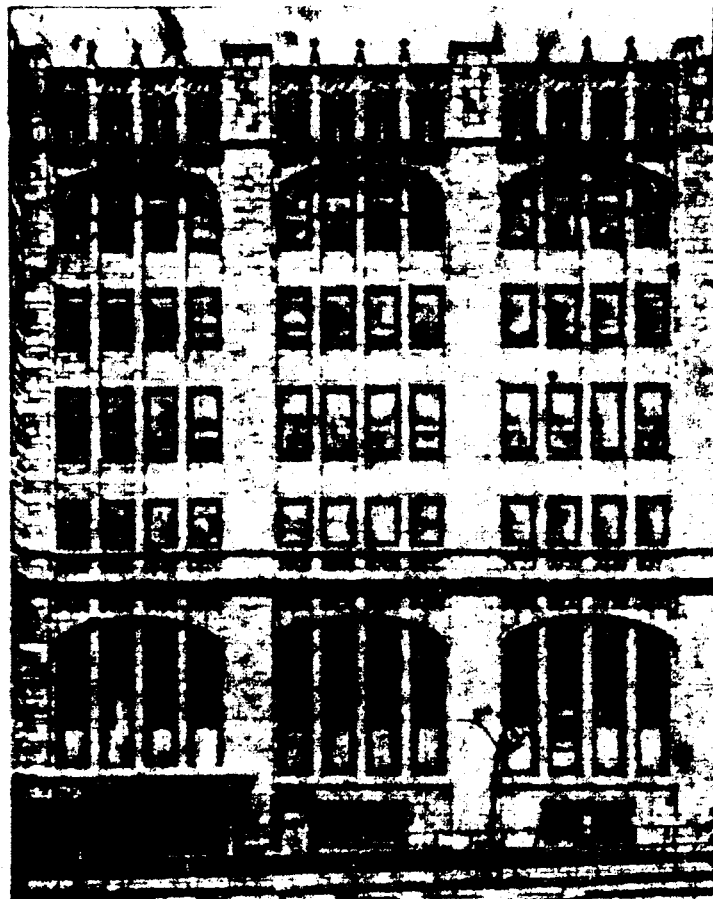
大同生命ビル

保健会社が一樣に弄っているこの點、興味があるのだから。尤もと、岡田三
は普通趣味の旺盛な人であったと言ふから、ヴォーリズほどは、船場の設計者
であつたのである。

このまことに見にくると、不意識はふつに大和社長下利正太郎と大和生命の
店、岡田三に片角項を見出すことができる。

大同生命ビル（現、大同生命肥後橋ビル）

この大同生命ビルは現在大同生命肥後橋ビルと呼ばれ、貸しビルとな
っている。このビルは8階建て、現在地下は田ッ橋線肥後橋駅の連絡口
であり、5～6階の飲食店が入居。1階はコーヒーマップ店、2～4



階は大同生命事務所。6～8階までが貸事務所となっている。

写真は大同生命ビルの外観を廻りて、これによつてもこのビルはゴシック様式の建築であることがわかる。

『大正という時代』

ヴォーリス建築事務所は琵琶湖畔の田舎町近江川幡にありはかり、ほとんど全国スケールの活動範囲を誇っていた。明治以降は強力は中央集権体制が敷かれたこと。工業化による人口の都市集中もあって、東京ともなれば、京都大阪と拠点とせずには広域的な活動は不可能と見做れた最中であって、近江川幡という田舎町に全国的活動範囲を誇る設計事務所があること自体驚異に面する。それも、建築教育を受けなかった人達の集団が全国的な活動をするのであるから。

ヴォーリスが存在し得たのは、どこまでも米国人であるがために欧米の建築知識を身につけていたことであることという再考になるものがある。この期待に応えることが出来なかったのは、彼は一作か二作を建築家として抹殺されていったのであるが、幸い芸は身を助けたのである。しかし、ヴォーリスは米国で専門の建築教育を受けたわけでもない、あくまで趣味を続けていたのがきっかけで設計を本格的にやりだめたのである。

また、このようなヴォーリスと許容した当時の建主達の“西洋好み”も思われる。ヴォーリスは大正時代に彼の全盛期を迎えるのであるが、大正時代は彼のような外国人までもと受容し易い時代である。たゞである。設計の依頼主達も下村正太郎や広田徳三のおこに洋行帰りの実業家達であり、皆耳若く清新の気にあふれる大正人達であった。当時、知識人達はキリスト教への関心も強く、無論外人に対する寛しむも明治人に比べたスマートには、これにあらずから、ヴォーリスにとっては患いもかけられず時々の依頼もたつと鼻に要因でもあったのである。

大正時代、それは不安定な時代であり、日露戦争の勝利による栄えの繁盛と平和を望んだばかりの如き時代であった。ヴォーリスもこの大正時代に住まわり、揺れ動く舟の中にいるあつは心地を感じていたのだらう。多くの建築の依頼が来れば来るほどビクチャレスク的に古典型の適用をしてい

る自分の建築事務所に対し、ヴァーリズ自身が持つこの鋭敏な時代感覚は
“附庸”という声を聞き取ることが出来たのか。しかし、ヴァーリズの中
には反面、不安定な時代でありはあるほど今まで持つべきものに固守しな
こととする気持ちも働いていたのではないのか。また見方を変えるべし、古典型
の応用を止める主眼はリヴァーリズの“Self-cognition”、という革命的な過
程と、また、神に仕える場、兄弟社の経営を支える場としての建築事務所の
立場と考えるし、どこに新しい変革の時代に遭遇した時に認識された価値体
系を保持するという昌隆の強い道を選んだのは当然かもしれない。

彼自身の言葉の中にその姿勢を感じる事が出来る。

『吾々の主眼するところは建築上の様式が、非常に自立、に進出を試みん
するものではない。』『吾々が従来主眼とし来りしことは、コンクリ
ート堅固に基き、常規化した建築と、通行人が瞥見して驚き倒れしめる
ためでない。』『若し建築物が氷結した音楽であるとしたらば、何も態
々凍ったジャズ音楽を以って、風景の美を損傷とする野心は吾々にはな
い。』(13)

ことこの建築のデザイン・ポリシーに関しては、あの高校時代、大岩塔と経験
した“不可能といわれていたことを実験してみる熱情”が見られ、組曲
の運営の中にその“熱情”が見出される。自身の歩みの中にその“熱情”
が見出されても、その事務所デザイン・ポリシーの中にその不可能を実験し
てみる熱情が見出すことができた。

ヴァーリズの作品集は、1908年から1926年までの約20年間の作
品を集めていたが、その作品のデザインに新しい変化はない。

この作品集の序文に次の言葉がある。

『日本の明治初代に於ては東洋美術（私もその一人であった）は、その国
々の独特の美しき建築物に、その時代々の必要及び要求に応じ、西洋建
築の様式を適用すべきであるという世界的微菌に蝕まれたのである。然し

作ら、時を経るに任り、この疾病から救われたのである。――吾々は建築のみならず、その他すべての事物が新しき様式を見出さんとする過程、即ち過渡期にあることを知るに至ったのである。

外人建築家等にはあまり倣みよい業ではありけれども、現代日本建築に日本古代建築様式を適用せんとする開拓的専業に携るものは、有らく日本人が適任にして、外国人はこれを遠慮すべきであると言え考えるに至った。且又吾々は新進日本建築家達のために、西洋建築の解説者となり、またその様式適用のさき協力者たり更に生ける参考書となり、以て吾々は謙虚にして合法的立場を守るべきである――。』

ここに明らかにされているように、ヴォーリスはその建築家等の仕事にあつて、日本に西洋建築の伝統を伝達しようとしたのである。その意味ではヴォーリス自身が書いていっているように、明治初年からの外国人の建築家達――コンドルなどと同じ役割を果たそうとして、それを実行したことが認められる。その意義からいえば、ヴォーリスはコンドルなどのように日本政府から招かれた人々よりも時代のうえでややおくれ、しかも大学や官庁とはま、たく関係がなかったもので弟子たちを輩出しはかった点ではユニークである。しかしヴォーリスがまったく日本人の建築家たちを育てなかったというのではない。戦前において最盛期に40名近い所員がいたといわれる大塚事務所の所員のほとんどが日本人である点から見ても、ヴォーリスには多くの弟子たちをいたのである。しかし彼らが日本の建築界で日の当る場所での活躍ができていなかったことは確かである。

その原因として新しい建築デザインの傾向に対してはヴォーリス自身否定論は立場を取らざるを要す。その弟子たちも様式折衷方法のモディファイの側面を受けていたからである。とはいえ個々の所員の中に独立して新しいデザインを提案しようとするものが少なかったのである。それは彼らの保守性、抑々排外性によるものとは一審明にはいえないのではないだろうか。なぜか

ら、ヴォーリス建築事務所は、他の事務所とは異ってあくまでも構成員がクリスチャンであり、多くの人が設計の仕事と伝道の仕事の両方に携わっている。彼らにとって建築設計は総辞職までして神に仕えるとした奉仕の場なのである。つまり、ヴォーリスにおいては「建築のための建築」ではなく、神のために用いようとした建築なのである。狭く言えば「建築即伝道」なのである。だから、あえて施主の希望を無視したり施主の好みを才義的なこととはできないのであり、自分の建築的展望を前面に押し出し自分のデザインポリシーを強く押し通すことはしないのであり、またする必要はなかったのである。社会の建築的好みに卒直に答えていくのがヴォーリス建築事務所の姿勢なのである。

ヴォーリスにとって建築はある種的手段であつたのだろう。決して「建築のための建築」とはならなかった。

『ヴォーリスとレーモンド』

戦後まもなく国際基督教大学が作られた時、その敷地が中島飛行機工場跡地で、その真中に事務棟が残されており、戦後のもの不足の時でもあったので、それをどうすべきか学校当局の方からヴォーリスとレーモンドに相談があり、ヴォーリスはそれを残して使うべしと主張し、レーモンドの方は取りこめて新たに配置計画を立てることこそ本筋であると言って両者相い譲らなかったと言う。結局再使用派のヴォーリスに設計の依頼があり、レーモンドは一般地にまみれることとなった。レーモンドは建築家であり、当然キャンパス全体を全く自分で描いた計画によって作られるべきであり、敷地の真中にある既存の建物など邪魔で仕様がなかったに違いない。却にヴォーリスの方は建物のみでは自立すべきものではなく使う人間によって住きもし死にもすると考えたであろうから、既存の建物がどうあるとばかりで、それ程苦にすることではなかったに違いない。そして、いよいよヴォーリスが講堂を作った時、最終の計画の半分の規模のものがまず実現することになり、大抵でも見られるように最終の形を丁度半分で割ったような形で設計した。ところが音響効果が悪く苦情があり、ヴォーリスは全部出来た時には所定の効果が発揮するようになっていると力説したが、後にレーモンドがあって彼は素人の建築のことは何も判らねず、それで失敗したのだと盛んに悪口を言ったものだから、つい学校当局もその気になり、レーモンドに新に依頼し出来上がったものはやはり同じように音響効果が悪かたと言う。しかもヴォーリスのものは取りこめられてしまったらしい。日本人にはない救済さではあるが、確かに、レーモンドが言うように、ヴォーリスには専門家ではないある気持さが一部に見うけられることは否めない。後の建物には喉を口ずさみ楽しみながら作られたという能力が見られないわけはない。

この国際基督教大学のことがレーモンドの自伝に書いてある。

『この大学計画の主任建築家に指名されたことは悦ばしいことであつた。
……先任建築家の事務所の若い人ひとととも、相手さえ承知すれば、私は喜んで協力するつもりであつた。しかしそうはいかず、私が引き続くことになつた。

Ⅰ・C・Ⅰの敷地は、面積も場所も壮大であつた。そこにはかつて飛行機工場たつた建物の残骸とか、道路、水道本管、下水路、その他工場施設などがごつた返し、先任建築家の無秩序と弱気な努力の結果があつた。新しい建物はできるだけ配置され、教会のような植民地スタイルから、建築事務所の奥習生による準現代風なものまで、合理的な総合計画の跡はなかった。管理施設、図書館、教室などは旧工場の事務所の建物に入り、体育館や集会場は、廃棄された鉄骨の工場の中に計画されていた。すべては善意と節約によるもので、物を大きく見ることができない布教的な気分に支配されていた。向かふ本当に卓越したことのできる素晴らしい機会にめぐまれていることを、認識してはいなかつたのである。

私はその誤りを矯正しようと最善をつくしたが、そのつと心は無知によって妨害された。同じく無知な教師夫人たちの、受け入れる余地もない馬鹿げた要求にも出合つた。』

ここに国際基督教大学のことを述べたのは、同じ外国人建築家のヴォーリスとレーモンドがいかに違う考え方で、ひとつの建築に凝っているかを比較するためである。レーモンドはヴォーリスと同じように外国人であるといつて二つの特権を持っている。幕末・明治以降日本に来て、尊敬すべき業績を残した外人建築家は、かなりの数にのぼる。例えば、幕末に来日して大阪の若幣番や銀座煉瓦街の建設を指導した英人建設技師ウォートルスをはじめとする明治初期の工部省関係の外人建築家。その中から一歩地を抜いて日本建築界最大の恩人とされる英人建築家ゴンドル。明治19年設置された臨時建築局に招かれて来日し、並に若い日本人建築家や職人をドイツへ派遣して新

技術の吸収につとめさせ ドイツ系の建築技術の日本への導入の契機をつ
つたエーデルマン、あるいは明治の後半神戸旧居留地で活躍した
英人建築家ハインゼン等々。レーモンドも大正8年ライトの帝国ホテルの現場
監督のため来日して以来、その間戦争によって他ならずも不在にしも約10
年のブランクはあったが、日本において長きにわたって「日本の建築家」で
あった。と同時に、国際的な視野からしても、第一線の近代建築家でもあ
った。

ヴォーリスとレーモンドとを比較する時おもしろいことを発見する。同じ
ような時代に活躍し、同じような条件の下で生活している両建築家が、大正
という時代の谷間を境いに一方は様式建築を一生懸命モディファイした建築
を設計するのに対し、他方は近代建築の布教者ときまごきま一生懸命に近代
建築を開拓していくのである。日本に来ることがちょっと遅かったレーモン
ドは近代建築へ、大正へ入りかけようとしている明治の後半に来日したヴォ
ーリスは様式建築に身を投じているのである。ヴォーリスはまさに様式建築
の時代と近代建築の時代との「過渡期」に存在しているのである。

ヴォーリスが素人の身で建築事務所を開設しようとする時、レーモンドは
チェコの工科大学で建築を学び終めるのである。レーモンドが生まれたのは
1888年であるからヴォーリスより8年後に生まれているのであるが、建
築という道に本格的に歩み出す時期は同じといえてよいのである。また、ふ
たりが日本で一番はじめにした建築の仕事は、両方とも建築の監督であった
ことはおもしろい事柄である。ヴォーリスはドイツ人デルランの設計した京
都YMCAの建築監督、一方レーモンドはライト設計の帝国ホテルの設計監
督であった。そしてまた後の日本で成した建築の種類は不思議なほど井
通している。住居はもとより、学校、教会、病院などを重点的に設計してい
る。レーモンドの作品と有名なものに、住居では平ら板しコンクリートで作
られた豊前町の自邸(1923)やコルビュジエのアイデアを先にコピーし

てしまった「豊井沢の別荘」(1933)があり。学校においては、ロックフェラー財団の寄金により出資した「東京女子大学」(1923)や名古屋にある「南山大学」(1962)があげられるし、教会堂においては日本で5本の指に入るといわれる「豊井沢の教会」(1936)や、埼玉県志木にある立教高等学校の聖ポール教会、また聖アンセルム教会(1954)などカンリックの教会堂をおもに設計している。それに対抗するヴォーリズの作品を見ると、住宅において「下村邸」(1932)、学校において「神戸女学院」(1933)、教会堂においては「日本基督教団大阪教会」(1922)があげられるであろう。

これらの作品群を見ると、ほんとうには、きりと「近代建築」と「様式建築」の境界を見えしきう。同じような条件と同じような工事内容の中において、一方は「近代建築の布教者」であり、他方は「洋風建築のチャンピオン」と、対極的な立場にある。

レーモンドは日本に事務所を開いた時、ヴォーリズの事務所以前にいた若い建築家と共同でその建築事務所を開いている。そして大正12年に独立した。レーモンドという人はいろいろの意味で幸運である。1人の貧しい移民者である若い建築家が、いわば最もアメリカ的といえる超高層建築を設計するギルバート事務所への就職、そしてライトとの交わりとそれによる日本への訪問、日本の社交界への連絡、さらに奇妙ないい方だが、彼が日本で独立したその年の関東大震災の再建、もちろん、そこにはその運を現実化していける彼自身の実力があってこそ未来が開かれたことはいうまでもないが、それにしても震災後の東京でのレーモンド事務所の仕事は繁忙をきめ、次々と官邸は個人住宅、学校、大使館などを建てていった。それと同時に日本の財界人との知己も広がり、また在日外国人に関する諸施設をほとんど一手に引き受けるようになり、建築家としての社会的地位はもとより、彼が市へミスを旅立って以来、はじめての本格的な経済的な余裕も生まれるのである。

大正12年関東大震災の年、レーモンドの事務所は正式にレイモンド建築事務所は正式にレイモンド建築事務所を名乗るようになった。それとともにその年建てた「豊南坂の自邸」は、ある意味でのデザイン上の独立を意味するものであった。それまでの作品はすべてライトの影響が色濃くただるものだった。自邸が建てた時「私は完全にライトをぬけだしていた。」と言った。この自邸はインターナショナル・スタイルの自由なマッスの構成による鉄筋コンクリート建築であり、レーモンドの歴史にも画期的な作品で、新しい試みがいたるところに見られる。ここにおそらくわが国最初のコンクリート打放しの手法が用いられている。「自然は人工よりも美しい。簡素は複雑よりも美しい。節約は浪費よりも美しい結果を生む」という打放しコンクリートのデザイン哲学を打ち出している。
(14)

それに対してヴォーリスは非常に攻撃的な批判を加えている。ヴォーリスの作品集（昭和12年）の序文に見てみよう。

「--- 日本に於ける外国建築技師は、所謂モダン建築と称する突飛な様式を強制的に受け入れることを喰止める足止、又はブレーキとしての存在の必要がある---」というのがヴォーリスの信念であり、新しい建築デザインへの傾向に対しては

「--- モダン建築の一般的原則は、無意味な装飾的腐化した正面、建築家の自由と能率と拘束する時代後れの様式の不合理な束縛を解除すべきである。そして合理的な終極一貫した様式は、間違なく各自特別の必要に適合する空に進展すべきである。この一般的原則は、現在よりもなお一層将来に向って世人に認容される価値あるものであると感ずる。--- 如何なる建築物も「モダン」呼ばわりされて建てられるものである故に、守直せる装飾が建築界から影をひそめたかと思えば、又一方に無意味な縦横の線に満ちた、奇矯は統一のない様式の建物には、たゞ、モダン建築という一派の囁きの黄色い紙、経歴者が賑やかに宣伝するにかかわらず、現在日本の建築界の

中には、古い怪物の代りに新しい怪物を以てしても、この建築家のモダニズム病は治癒せられはいないのである。＞

と非常に攻撃的である。この作品集が1937年(昭和12年)であるということに興味深い。なぜなら、レーモンドも1935年(昭和10年)に、レーモンド事務所の作品集を出版し好評を得ているからである。戦争の直前であり作品をまとめておこうとする意図はあったにしても、ヴォーリスのこの攻撃的な文章からして、レーモンドを強く意識していたことはうかがえるのではあるまいか。

またレーモンドもヴォーリスのような様式をコピーしている立場を批判している。

『19世紀の古い様式を追いかけていた建築家達は、彼らの時代が過去の偉大な時代とは異なることに気づくと、過去の建築の模倣の上に、近代生活が必要とする変化に応じた、新しい形態の装飾を適用すれば、これによって同じような美が生まれ出せるであろうと信ずるにいたった。だが、現在われわれが知るように、形態の美とは動機と目的から生まれるものであり、彼らのこのような考えは全く誤りだ』たのである。』(18年間の日本生活、1938年の講義)(15)

そしてまた『真のモダニズムに向って』という論文でこのように述べる。
『「過去の時代」に戻る喜び、言う次元の文化の模倣や、文明の模倣は現在にさまよう人々、その偉大を恐れぬ人々、心の動揺を怖れぬ人々にのみ残されている。思うままの形を弄する人々の芸術は、模倣に近い。そして私には史家の次の言葉を引用するよりしかたがない。

『芸術が模倣に近づく時、創造ははなくなり、芸術ではなくなる。』』(16)

このようにヴォーリスとレーモンドは真向うから建築の上で対立するのである。

また、ヴォーリスは「現代日本建築に日本古代建築様式を適用せんとする

開拓的事業に携るものは、須らく日本人が責任にして、外国人はこれを遠慮すべきである」と出発し、むしろ「西洋建築の解訳者となり、またその様式応用のよき協力者となり、更に住ける参考書となり、以って吾々は謙虚にして合法的立場を守るべきである」と、日本建築の中にあえて入ろうとせず「外国人建築家」としての立場を守るのである。しかし、レーモンドはこれまた違う立場に立っているのである。なぜなら、レーモンドは日本建築の美に傾倒し、農家の自然を嘆賞し、大工の技術に深く傾倒し、ときに事務所にかう力けと下駄を用意して所員に用いさせようとまでするのである。そのようなレーモンドは南山大学の設計の際にこのように述べる。

『純粋とは創造のもっとも望ましい属性である。純粋は簡素を意味し、ものごとの核心に到達すること、あるいは力強い表現の邪魔になるすべてのものをとりのぞくことを意味する。私は日本の設計哲学から得たこれらの原則を、最近手がけた仕事、名古屋の南山大学の設計において厳格に守った。』(日本建築の帰依、芸術新潮)

南山大学において日本の真の伝統にしたがって、「日本が私に教えてくれた建築の指導原理、守らねばならぬきびしい法則」である建物のヒューマン・スケーールを保とうとしたレイモンドは、「帰依」という訳語がまさにピッタリするほど日本建築へ深く傾倒している。

しかしながら、ひたくにもレーモンドが守ろうとしたヒューマン・スケーールもヴォーリズの学校建築の代表作である「神戸女学院」にむしろ感じてしまうのは私ひとりだけであろうか。ヴォーリズは外国人にはまれはくさい小柄で日本人に体型が近いので、日本人のヒューマン・スケーールを把握しやすいのだろう。

それはいいとしても、レーモンドはこのように日本の自然と伝統を深く探り、日本に傾倒していく。日本の凡庸な日本の建築家よりはるかに「日本の建築家」であったのである。

しかしながら、ヴォーリスは建築においてレーモンドのように、日本建築に傾倒しはいたが、生活自体の中で、生活の身の置きどころとして日本に傾倒し帰依している。才2次世界大戦の直前に、あえて日本国籍を得て帰化するし、またマッカーサーに対して天皇のことで会見を申し出たことはそれをしめしている。

しかし、なぜヴォーリスは生活の上で日本に帰化までして、日本に傾倒しているのに、こと建築のことになると、まったく日本建築に背を向けてしまうのだろうか。またレーモンドと対極的な立場に、なぜ立たなければならぬのだろうか。このうはヴォーリスの姿勢を見て、反人としての賀川豊彦は、建築に門外漢であるのに、広い視野と熱い洞察を持って、ヴォーリスに注文している。

『ゆえに私はメレル・ヴォーリスが建築家だから大注文したい。それはライオンが帝国ホテルを建てて成功したか失敗したかしらぬが、とにかく日本を理解して日本に向くような、新しい様式の石造建築にしようと努力したと同じように、いっしょにおける住宅建築でも、その様式においても、少なくとも新しい日本の様式を創作すべきはずだと思う。メレル・ヴォーリスほど日本を理解している男が、ただ近代ルネッサンスくらいのところで、いっしょを創るのでは困る。ゆえに私は、メレル・ヴォーリスを愛するほど、常に大注文をしたかったのである。』（『近江の兄弟』序文、大正12年）

ヴォーリスと大正という時代の中に生きていてその建築の潮流は十二分に理解していただろうし、賀川豊彦の注文も理解していたのではないかな。ではなぜヴォーリスはレーモンドのように様式建築をステップにして、現代建築に手を伸ばしジャンプしはいたのだろうか。前節で少しこのことについてみて、つまり、ヴォーリスにおいて、建築即伝道、であったこと、また建築即財は利に依る場であったこと、そのことは建築もある目的のための手段としたのであつたことである。様式が大衆より要求されていた大正にあつた。

ては、ヴォーリスにとって様式すらある目的のための手段または技術であつたのではないだろうか。そしてヴォーリスにおいては、レーモンドのようは“建築即芸術”ではなく、また“建築のための建築”でもなかったのだろう。『吾々は建築のみならずその他のすべての事物が新らしき周囲の状況に適応するために、新らしき様式を見出さんとする過程、即ち過渡期にあることを悟るに至った。』(17)

このように“過渡期”に生きていることを悟り、その危機限界を感じていながら、‘建築即芸術’、‘建築のための建築’ではないヴォーリスにとつてはあえて、

『外人建築技師ではあまり飲みきれないけれども、現代日本建築に日本古代建築様式を適用せんとする開拓的事業に携るものは、須らく日本人が適任にして、外国人はこれを遠慮すべきであるとさえ考えるに至った。且又吾々は新進日本建築様式応用のよき協力者なり。更に庄ける参考書とせり。以て吾々は謙虚にして合理的立場を守るべきである……。』

という立場を取らざるを得なかったのではないだろうか。レーモンドのようた建築のあるべき姿を追求していくことは、ヴォーリスにとってオ2義的なことであつたのではないか。

ここに明治43年の様式論争のときに、こうした論争そのものからして「くだらない」と嘲笑し去った人物があつた。鉄骨造りを開拓した横河民輔である。横河民輔によれば、様式というものは、どうでなければならぬという性質のものではない。まして、日本には日本独自の様式がなければならぬという理屈はない。ただ、建築をどうすればいいのかという問題ならば、おおいに国際的になるべし、世界的になるべしと主張する。洋服を着ようが、洋食を食おうが、日本人は日本人だし、日本は日本だ、というのが横河民輔の根本的な考えであつた。

当時すでに横河工務所のほかに、横河橋梁製作所を設立し、のちには横河

化学研究所、東亜鉄工所、横河電機と、次々に手を広げていった事業家である。多くの建物を建てたが、自身で図面を引いたことがない、とさえ言われた。もちろん、横河民輔は芸術を解さぬ人ではなかった。しかし、建築というものは、芸術というよりビジネスである、と考え、ビジネスであるからこそ、技術的につねに新しい高度なものを、ときには豪華なものを、またつねに人々の求めるものを提供するのであると考えた。

横河民輔の思想的背景は、アメリカのビジネスであり、アメリカの商業精神にあった。

このような横河民輔の考えを見とくると、私には、横河民輔にヴォーリスの姿が投影されて見えこ来るのである。

ヴォーリスが産業界でクリスチャンとして奮闘しようとしたが、もしそれが建築の仕事の上でも同じであるなら、横河民輔の考え方がヴォーリスの中にあってもおかしくはないのだと思う。

建築の世界は多様である。古いものも新しいものも同時に建てられ、その時はとくに怪しむこともない。このような世界においては、それらはなんらかの指導的原理をより鮮明に示した建築であった。しかし、現実には、より性格のあいまいな建築が多数を占めている。ヴォーリスが全盛期をむかえて、そしてレーモンドが来日した大正時代の特色は、そうした混乱が、おおいに意味を持っていたということである。可能性のすべてのもの、実現できるすべてのものを陳列すること、そして時の試練を待つことが、その時代の歴史的使命であったのである。

人の多くが苦勞して暮らしていた大正という層の上で、ヴォーリスが勝ち残ったか、レーモンドが勝ち残ったか、それは、今のこの時が証明してくれている。

しかしながら考えてみなければならぬ。レーモンドの言った節制とは、

節約とはい、たい何であつたのだろうか。人を撃ち、その視線をとめる建築家の手の痕を苦勞という言葉で代用する時、その苦勞が売りものにならなくは、て主なのが現代である。苦勞しないことが“進歩”であり“近代化”とされてきたのである。苦勞はむしろ悪として斥けられてきた。それは“ひ。かかり”だからであり、遅れたもの、前近代的なものとされてきたからである。設計者には、苦勞するとか、苦勞したとかは常句と化した。苦勞は金がかかる。手間をくうと建築主に故遠されるからである。施工業者にしても同様に苦勞は常句である。遅れた体質、非合理的な技術として遠ざけられるからである。かくして苦勞はありません。かくして何も苦勞はありません。かくの如く早く早くできるのです。ということだけが売物になる。初めは遅せ我慢でありウソであつても、やがて本物になる近代化であり、合理化である。かくして、建築への手ざねのりも視線も、ついにとまるところを失つてしまつたのが現代である。

レモンドはこの現実を予期していただろうか。

最近一種の様式建築ブームが巻き起つてゐる。ウォーリスの建築も例外ではない。ウォーリスの設計した“大阪教会”は最近とみに注目されている建物である。この大阪教会を訪れる建築学生が後を断たないものである。見学者達がこの建物を見て何を思ひ何を感ずるのかはわからない。しかし、間違いなく赤煉瓦の外装には満足するだろう。むき出しのコンクリートに飢えた者達にとっては、この建物の赤煉瓦は砂漠に浮いたオアシスなのではないだろうか。

— お め り に —

「9番線…… 22時28分…… 東京発…… 大田行き……。」

旅行に必要なものすべてを詰め込んでしまったマリモと太ったリュックサックを背中にし、両手にカメラとスリッチ・ブックを持ち、私はプラットフォームに止まっていた夜行列車に飛び乗った。

リリリリリリリリリリ……。発車のベル。

はじめ列車は静寂だった。しかし、列車が東京を離れるにしたがって、サラリーマン姿の人たちは夜の道段に散っていき、車両の中には数人しかいなくなってしまう。私は列車を奪った「独裁者」の気分で、占領した睡掛けに器用に構になって寝た。

列車は夢とは別に 南へと向っている。

目がいたい。私は目がさめた。朝焼けは、車内を明るく赤く染めている。通勤客たちがドヤドヤと列車の中に入ってきて来た。

夜行列車は一変して「通勤列車」となってしまった。

「おはようさん!!」「おはようさん!!」 関西弁の会話。

はにか、非常に楽しくなってきた。

私は押し出されるようにして、リュックサック背中に列車を降り立った。

近江川橋はさびしい町であった。人はあまりいなくなっていた。

私は、60オ位のおじいさんに道を尋ねようとした。

おじいさんはまじまじとリュックサック姿の私を見回した。

「何しに来たんや……。」「……ウォーリーズさんのことを調べに来たんや……。」
「……。」「……ホォー……いいことや……。」

何がいいことなんだろう? 後になって考えた。

その言葉が耳に焼きついて離れない。

私は、昼間頃、パンをかじりながら、バス停のベンチに睡掛けていた。

ヴォーリス記念病院（近江サトリウム）を訪れるためである。

70才位の着崩も着た やさしそうなおばあちゃんが、私の傍にすわった。
しばらくの沈黙の時……。

「……どこからこられましたんや……。」とおばあちゃんが沈黙をやぶる。

「東京です……。」

おばあちゃんは大きくうなずいて私の顔をまじまじと見て、

「私の孫も、今東京の大学にいますんや……。」

もう、話しははずみにはずんだ。おばあちゃんの孫の話、自分の暇の話……。

そして、ひまなことからヴォーリスさんの話しになった。しめたヒばかり

に、私はいろいろとヴォーリスさんのことを聞いてみた。

「私が小さい頃、ヴォーリスさんからイメ玉を^{ちがい}（~~あ~~）ましたんや……。」

なにが急に、私の中でヴォーリスさんを身近に感じた。うれしかった。

おばあちゃんはヴォーリス記念病院を親切に教えてくださった。

バス停からバスが出、私たちが別々になる時、おばあちゃんは

「また！ さようなら」とバスから身を乗り出すようにして、手をいっしょ
うけんめい振ってくださった。

私はなんだか、むしろにうれしくおしゃべりした。

ひとりの未経験は青年開拓者が、事業経営のための何の道具立てもなく、
形に現れた何の資本も持たないのに、無謀にも大胆な計画に突進しようと
する。彼は 経験あるその道の専門家が「そんな努力は無駄である」とか、
「無理は、そんなふうに行くものではなし」とか言って、注意や警告を受け
る。しかし、彼はその好意をも退け、身のほど知らずに、大それた冒険に乗り
出すのである。

何が彼をそうさせるのか？ 彼の答えは

「私が1個の人間となるかわりに、1個の道具にはろうとして真実に努力

したことにある。自然の帰結であつたかもしれない。

私は信ずる。すべての成巧とは意識するとしなれどにかかれず、完全に神の意志の道具になりきつた者の到達する境かゝりであり、すべての失敗とは創造主との接触を失うか、神の導きに依れずに、自己の欲望や考えに従つたために、神との連なりが遮断された者の行きつく到達点なのである。

』（失敗者の自叙伝より）

彼は最後にこのように啓えられた。

本文注釈

- 1) 「失敗者の自叙伝」 一柳米来留 著
- 2) 同上
- 3) 同上
- 4) 「近江の兄弟」 吉田 悦蔵 著
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 月刊誌「湖畔の声」
- 9) 「ヴォーリス建築事務所作品集」
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 同上
- 13) 同上
- 14) 「私と日本建築」 A・レーモンド
- 15) 同上
- 16) 同上
- 17) 「ヴォーリス建築事務所作品集」